

全国紙・地方紙・地域紙から見る  
宮城県女川町に関する東日本大震災報道の変遷  
ー災害報道における新聞の使命ー

LM20-1102J

鈴木 風結花

## 目次

|                                     |    |
|-------------------------------------|----|
| 1.はじめに .....                        | 1  |
| 1-1 東日本大震災の記憶 .....                 | 1  |
| [私の体験] .....                        | 1  |
| [父の体験] .....                        | 1  |
| [震災後の女川を見て] .....                   | 4  |
| 1-2 東日本大震災の概要 .....                 | 8  |
| 1-3 宮城県女川町の概要 .....                 | 10 |
| 1-4 宮城県女川町の東日本大震災被害 .....           | 11 |
| 2.調査概要 .....                        | 13 |
| 2-1 調査内容 .....                      | 13 |
| 2-2 調査方法 .....                      | 14 |
| [調査対象紙 概要] .....                    | 14 |
| [調査条件] .....                        | 16 |
| 3.調査結果 .....                        | 18 |
| 3-1 復旧期（2011 年度～2012 年度） .....      | 21 |
| 3-2 基盤整備期（2013 年度～2015 年度） .....    | 23 |
| 3-3 本格復興期（2016 年度～2018 年度） .....    | 24 |
| 3-4 総合計画期（2019 年度～2022 年 8 月） ..... | 26 |
| 3-5 4192 日の新聞報道 .....               | 27 |
| 4.女川町に関する東日本大震災報道の紙面比較 .....        | 30 |
| 4-1 七十七銀行女川支店訴訟 敗訴 .....            | 31 |

|                                 |    |
|---------------------------------|----|
| [七十七銀行女川支店訴訟 概要] .....          | 31 |
| [紙面比較] .....                    | 32 |
| 4-2 女川原発 2 号機 再稼働地元同意 .....     | 35 |
| [女川原発 概要] .....                 | 35 |
| [紙面比較] .....                    | 38 |
| 4-3 いのちの石碑 21 基目完成 .....        | 41 |
| [いのちの石碑 概要] .....               | 41 |
| [紙面比較] .....                    | 43 |
| 4-4 東日本大震災発生直後 .....            | 45 |
| [震災直後の地元新聞社] .....              | 45 |
| [紙面比較] .....                    | 47 |
| 4-5 女川 まちびらき .....              | 53 |
| [まちびらき 概要] .....                | 53 |
| [紙面比較] .....                    | 55 |
| 4-6 紙面比較から見る各紙の傾向 .....         | 58 |
| 5. まとめ .....                    | 60 |
| 5-1 私が見た女川と被災地 .....            | 60 |
| 5-2 3・11 報道のこれから .....          | 62 |
| 5-3 全国紙・地方紙・地域紙 それぞれの立ち位置 ..... | 66 |
| 5-4 研究の今後の展望 .....              | 68 |
| 【参考文献】 .....                    | 70 |
| 【参考 URL】 .....                  | 71 |

## 1.はじめに

### 1-1 東日本大震災の記憶

#### [私の体験]

2011年3月11日金曜日午後2時46分。その時どこで何をしていたらろうか。私は当時小学校3年生で、ちょうど帰りの会が終わる時だった。起立して数秒すると教頭先生が「緊急地震速報です。机の下に入ってください。」と校内放送で呼び掛けた。放送が流れたその時はまだ揺れを感じなかったため、前日に学校で行った避難訓練の続きが予告なしで始まったのかと思った。しかしそうではないことはすぐに分かった。私が住む東京も大きな揺れに襲われ、それまで経験したことのない揺れに恐怖で泣き出すクラスメイトもいた。後になって振り返ると、私はその時初めて地震というものを理解できたように思う。

すぐに校庭に避難し、親の迎えを待った。母が迎えに来ると、私はランドセルを背負わずに上着も着ずに上履きを履いたまま帰宅した。家は棚から物がいくつか落ちていた程度で、目立った被害もなくいつも通りだった。テレビをつけると津波が川を逆流している中継が流れていた。しばらくテレビを見てみると、さっきの地震によって東北で大きな被害が出ているらしいことが分かった。

#### [父の体験]

3月11日朝7時半頃、父は宮城県女川町に行くため車で東京の自宅を出発した。女川町は父の故郷である。私の祖母が女川で一人暮らしをしていたが、正月明けから一時的に埼玉の伯母の家に来ていた。祖母が彼岸前に女川に帰りたということで、父は埼玉の伯母の家で祖母と伯母を車に乗せ、女川に向かった。

三人は東北自動車道安達太良サービスエリアで休憩を取り、東北自動車道を走り続ける。三陸自動車道へ進み、午後2時頃松島あたりで雪が降り始めた。一般道へ降りる石巻河南ICまでもう少しのところを走行していた午後2時46分、地震が起きた。車は激しい揺れで蛇行し、ひっくり返されるかのような感覚が数分間続いた。車内の祖母と伯母はパニック状態だった。揺れが収まり、周りの車が動き出したのを確認して、車を恐る恐る走らせ石巻河南ICから一般道へ出た。余震が続く中、信号が全て消えた石巻市内を走っていくと、北上川の水位がかなり下がっているのが見え、父は津波が来ることを確信した。ラジオから津波が来

るという声が聞こえる。

後から考えれば大津波が来ると当然分かるが、その時は大変なものと思っていなかったため女川に向かった。この2日前、3月9日に起きた三陸沖の地震の津波では女川港に少し水がかかったくらいだったと聞いており、今回もその程度の津波だろうと想像していた。石巻から女川へ行くには山を越えるルートと内海の万石浦湾沿いのルートがあるが、地震で山道は危険と判断し海沿いのルートで女川を目指した。津波から避難しようとする車で反対車線は混雑していたが、海に近い女川方面へ行く車はほとんどなかった。

ようやく女川町内に入ることができ、家まであと数kmのところまで渋滞し車は止まってしまった。歩いて確認してみると道路の先は一面の泥水でいろいろなものが流されており、既に津波が来ていたようだった。別のルートで向かう方法もあったが、ガソリンが確実に不足するためどうしようもなかった。前方に並んでいる車のうち1台がゆっくりと水たまりの中に入っていくのが見え、もう後戻りできないため父たちも車でその水たまりへ進んだ。なんとか通り抜けたが、その先の道は通行できないほどの大小のがれきが散乱していた。

女川の高台に出る道へ進もうとした。しかし雪がかなり積もっているところがあり車は登れなくなってしまった。近くにいた男の人たちに車を押しもらった。その男の人たちに、父が実家のある辺りはどうなっているか聞くと、「ダメだ、ダメだ！津波でやられて、もう家なんかねえ！」と言われた。しかし父たち3人は「そんなわけではない、この人たちは大げさに言っているんだ」と思った。その男の人たちに言われた通り、すぐ近くの高校のグラウンドに車を止めた。

雪が降り続ける中、父は一人で歩いて実家を見に行くことにした。ひび割れたり歪んだりした道を進む。潮と油と泥が混じった焦げ臭いにおいが漂う。町が見渡せるところまで来たが人の気配はなかった。一面のガレキの山で、家がどこにあったか分からなかった。ただ、町は壊滅状態であることだけが分かった。

行き場がなくなってしまったため、避難所になっていた勤労青少年センターに行き、避難生活が始まった。避難所では担当者と思われる人から、住民1万人のうち半数が安否不明であること、避難生活の長期化の覚悟、水や食料など救援物資はいつ届くか分からないため協力してやっていく必要があることが説明された。食事は1日2食だった。近くの蒲鉾工場からの厚意で、蒲鉾、ちくわ、さ

つまあげが配られた。練り物関係ばかりだったが贅沢と言える状況ではない。当時、伯母の家にペットボトルのお茶が大量にあった。女川にいる間に家の屋根を修理する予定で、修理業者に差し入れするためにペットボトルのお茶を車に積んでおり、飲料水はそのお茶でしのいだ。

祖母が持っていた携帯ラジオを聞いてみると、仙台・気仙沼・陸前高田・南三陸などの被害状況を伝えていたが、女川や石巻の状況は流れてこなかった。避難所では祖母の携帯ラジオから主に情報を得ていた。他にも人づてに情報を知ることもあった。また、震災から何日か経った頃、どこかから来た河北新報を回し読みしていた。父は、3月15日の福島第一原発爆発の記事を避難所で読んだ記憶がある。

勤労青少年センターに避難していた近隣住民たちは家がある人が多く、昼は家の片づけをしていたため、避難所は閑散とした。家が流された人は父たちと数人だけだった。夜になると近くの住民たちも避難所に集まってきた。

地震から2日目、給水車が避難所に来るようになった。3日目にやっとヘリコプターが上空を飛んでいるのが見えた。5日目くらいからようやく避難所に救援物資が届き始めた。それまでは食料は被災の少なかった近所の家から持ち寄って、みんなで分け合っていた。

地震から8日目の3月18日、ガソリンスタンドが営業再開したという情報を避難所の人が教えてくれた。先着200台まで10リットルだけ給油可能だったが、父のいところがガソリンスタンドの知り合いに事情を話して内緒で20リットル給油してもらえるよう交渉してくれた。さらに、父のいところが勤めている運送会社でフォークリフト用に保管していたガソリン15リットルを分けてくれた。給油できたが町ではガソリン泥棒の噂もあったため、高台の住宅地にあり被害が少なかった父のいこの家の駐車場に車を入れ避難所に戻った。

翌日3月19日朝7時半ごろ避難所を車で後にした。三陸自動車道と宇都宮までの東北自動車道は一般車両通行止めだったため、一般道で東京を目指した。ちょうどこの日の午後から一般車両も通行できるようになった宇都宮から東北自動車道へ入った。埼玉の伯母の家に着いたのは夕方だった。伯母家族全員、家の外で待っていた。午後7時ごろ東京の家に到着した。普段なら5、6時間で到着するが、この日は避難所を出てから11時間半が過ぎていた。

以上が 3 月 11 日、宮城で被災した父の記録をもとにした、震災直後の女川町の様子と避難所生活である。

### 〔震災後の女川を見て〕

私は震災から 5 カ月後の 2011 年 8 月、震災後の変わり果てた女川の町を初めて見た。震災前、家の建物のすぐ後ろのコンクリートブロックに祖父が青いペンキを塗っていた。建物らしい建物が全く無くなった町だったが、青いペンキが目立っており、すぐに家があった場所を見つけることができた。震災直後、父が家を探しに行ったが、場所が分からなかったのは、津波の泥などの汚れで青いペンキさえもよく見えなかったからだそうだ。家の向かいの整骨院があった場所の駐車場に車を止め、家を見に行った。見覚えのある玄関タイルとどこかから流されてきたと思われる食器が転がっていた。広く感じていた家だったが、残された基礎の部分だけになるととても狭く感じる。雑草が茂り、どこかから流されてきたかぼちゃの種が花を咲かせ小さな実をつけていたのが印象的だった。

震災前は夏休みと冬休みに女川の家に泊まり、近所の公園で遊んだり、山に虫取りに行ったり、花火を見に行ったり、マリンパル女川に行ったり、石巻に買い物に行ったりするのが当たり前だった。東京で生まれ育った私にとって、海の香りがする女川で過ごす時間は新鮮で大好きだった。

震災後の女川は復興工事の影響で行くたびに町内の道路が変わった。それは住民が“日本一カーナビが使えない町”<sup>1</sup>を自称するほどだった。家の目印だった青いペンキも町の造成工事でいつの間にか見えなくなっていた。家があった場所は、今は駐車場になっているようだ。

祖母が高齢ということもあり、コロナの影響でこの 4 年ほどは女川に行くことができていなかったが、2023 年の夏ようやく女川に行くことができた。女川を中心部は平地であるため、津波の被害を大きく受けた。家があった場所も中心

---

<sup>1</sup> 石巻日日新聞 2018 年 11 月 10 日 1 面「復興現場をゆく 未来につなぐ道⑫完：女川町中心部 本年度で道路整備ほぼ完了 新たなまちの生活路整う」

部のある平地だった。復興は進み、町は新しい女川になった。女川での用事を済ませると松島のホテルに泊まるのが震災後の慣例になっている。松島に向かうため女川駅から石巻方面へ車を走らせる。伯母が「うちがあったのってどこだろう」と言う。父も祖母も「わからない、もう通り過ぎたんじゃないか」と言った。復興が進み、女川は被災地の中でも復興のトップランナーと言われることがある。まちは女川で生まれ育った人たちでもかつての面影が全く分からないほどに復興し、変化している。

### 【写真 1】震災 3 日目の女川町中心部<sup>2</sup>

- ① 祖父母家があった場所
- ② 熊野神社につながる階段
- ③ 左右の茶色い建物がマリノパル女川
- ④ 七十七銀行女川支店
- ⑤ 堀切山、町立病院
- ⑥ 熊野神社
- ⑦ 女川高校
- ⑧ 勤労青少年センター（父たちがいた避難所）

---

<sup>2</sup> 「朝日新聞縮刷版東日本大震災：特別紙面集成 2011.3.11－4.12」 p.24

↑石巻

万石浦湾  
(内海)

巨人が踏みつぶした  
ように跡形もなく壊  
滅した宮城県女川町  
の中心部(3月13日)



↓女川湾 太平洋

## 【写真 2～7】 震災から 5 か月後の女川

(祖父母家跡地から撮影。撮影日はすべて 2011 年 8 月 8 日)



写真 2

斜めに石が積みあがっているのが熊野神社の参道へ上る石段（階段の下には大鳥居があったが津波で流された）



写真 3

手前の国道 398 号を挟んで向かいにあった整骨院（写真右半分が整骨院建物跡、左半分が駐車場）



写真 4

女川港方面

中央にある茶色の横長の建物がマリンパル女川



写真 5

家の目印になっていた青いペンキ



写真6

ドアも壁も何もかも無くなったが、  
玄関タイルは剥がれず残っていた



写真7

家の基礎から生える雑草に交じっ  
て生えていたかぼちゃ

## 1-2 東日本大震災の概要

2011年3月11日午後2時46分、三陸沖を震源としたマグニチュード9.0の地震が発生し、宮城県栗原市では最大震度7を観測した。日本で過去に起きたことのない巨大地震は東北地方だけでなく北海道から九州まで日本列島を襲った。地震発生直後の午後2時49分、北海道から九州まで津波警報（大津波）が発表され<sup>3</sup>、津波は東北から関東の太平洋側で観測された<sup>4</sup>。えりも町庶野（北海道）で最大波午後3時44分に3.5m、宮古（岩手県）で最大波午後3時26分に8.5m以上、大船渡（岩手県）で最大波午後3時18分に8.0m以上、釜石（岩手県）で最大波午後3時21分に420cm以上、石巻市鮎川（宮城県）で最大波午後3時26分に8.6m以上、相馬（福島県）で最大波午後3時51分に9.3m以上、大洗（茨城県）で最大波午後4時52分に4.0mの津波が観測された（検潮所の観測値）。3月13日午後5時58分にすべての警報・注意報は解除された。

<sup>3</sup> 気象庁 津波警報等の発表状況の推移 p.61 平成23年3月 地震・火山月報（防災編） ([jma.go.jp](http://jma.go.jp)) （2023年11月24日最終閲覧）

<sup>4</sup> 緊急災害対策本部とりまとめ報「平成23年（2011年）東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）について」（令和5年3月9日14:00現在） p.5 torimatome20230309.pdf ([bousai.go.jp](http://bousai.go.jp)) （2023年11月24日最終閲覧）

東京都内でも人的被害、建築物等被害があった<sup>5</sup>。この地震によって7名が死亡、116名の負傷者が出るなどの被害となった。住宅の全壊、半壊等は3,500棟を超え、火災は33件発生した。また、首都圏の鉄道は地震発生直後から全面的に運行を停止し、施設の安全確認を行った。その後同日におおむね運行を再開し、終夜運行を実施した。交通機関の停止に伴い多数の帰宅困難者が発生した<sup>6</sup>。鉄道の運行再開の際には帰宅者が集中し、都内の各駅では運行情報を確認するため多くの人が詰めかけ、混乱が生じた。また、駅ロータリーのバス停やタクシー乗り場では、バスやタクシーを待つための長い列ができた。

東日本大震災による死者は全国で19,765人、行方不明者は2,553人、負傷者は6,242人、被災建物棟数は全壊が122,039棟、半壊が283,698棟、一部破損が750,020棟にも及んだ（消防庁 2023年3月1日現在）<sup>7</sup>。全国の避難者は31,438人（2022年3月9日現在）<sup>8</sup>。津波被害を受けた青森、岩手、宮城、福島、茨城、千葉の浸水範囲面積は561km<sup>2</sup>にも及んだ（国土地理院 2011年4月18日現在）<sup>9</sup>。

---

<sup>5</sup> 「東日本大震災における東京都の対応と教訓 ―東京都防災対応指針（仮称）の策定に向けて―」 平成23年9月東京都 [230914taiouhonsatu.pdf \(tokyo.lg.jp\)](#) p.16 （2023年11月24日最終閲覧）

<sup>6</sup> 「東日本大震災における東京都の対応と教訓 ―東京都防災対応指針（仮称）の策定に向けて―」 平成23年9月東京都 [230914taiouhonsatu.pdf \(tokyo.lg.jp\)](#) p.17 （2023年11月24日最終閲覧）

<sup>7</sup> 消防庁 平成23年（2011年）東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）の被害状況（令和5年3月1日現在）p.1 [163.pdf \(fdma.go.jp\)](#) （2023年11月24日最終閲覧）

<sup>8</sup> 緊急災害対策本部とりまとめ報「平成23年（2011年）東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）について」（令和5年3月9日14:00現在）p.2 [torimatome20230309.pdf \(bousai.go.jp\)](#) （2023年11月24日最終閲覧）

<sup>9</sup> 国土地理院 平成23年東北地方太平洋沖地震 市区町村別津波浸水範囲面積（概略値）第5報 [浸水範囲の面積（概略値）について 0412 青森県から千葉県まで完了 \(gsi.go.jp\)](#) p.1 （2023年11月24日最終閲覧）

### 1-3 宮城県女川町の概要

宮城県女川町は宮城県の東側の牡鹿半島に位置する面積 65.35 km<sup>2</sup>(令和 4 年)<sup>10</sup>の町である。女川町は三陸のリアス海岸で陸と海が入り組んだ地形になっており、女川湾の沖合には江島列島や出島など大小の島々が散在している<sup>11</sup>。町は石巻市に囲まれており、東側には太平洋が広がっている。(図 1<sup>12</sup>)

カツオやサンマの水揚げが盛んで、カキやホタテ・ホヤ・銀鮭などの養殖業が



図 1 女川町の位置

盛ん<sup>13</sup>な港町である。特に、サンマの水揚げは、女川魚市場の水揚げ魚種の中では

<sup>10</sup> 令和 4 年度女川町統計書 統計図表 (1) 町民の暮らし・県内における女川の位置 10 章 r04\_toukei.pdf (town.onagawa.miyagi.jp) (2023 年 9 月 24 日参照)

<sup>11</sup> 東日本大震災記録誌 p.8 海と山のまち、女川 女川町 東日本大震災記録誌 (town.onagawa.miyagi.jp) (2023 年 9 月 24 日参照)

<sup>12</sup> Map-It マップイット | 地図素材サイト 宮城県牡鹿郡女川町の地図 | Map-It マップ・イット (2023 年 9 月 24 日参照)

<sup>13</sup> 女川町ホームページ 町の紹介 町の紹介 | 女川町 (town.onagawa.miyagi.jp) (2023 年 9 月 24 日参照)

最大の数量・金額で、女川港は全国有数のサンマ水揚げ港となっていた<sup>14</sup>。また、女川町には隣接する石巻市に跨って東北電力女川原子力発電所がある。

女川は水産業と観光の町で、震災前は女川湾の目の前にマリンパル女川という観光物産施設があった。シーパルⅠとⅡの2つの建物からなっていた。震災時にこの屋上から撮影された津波の映像がテレビの震災特集番組で取り上げられることもあった。シーパルⅠは水産観光施設で、ヒトデに触ることができる水槽やカツオと同じ重さがついた竿でカツオの一本釣りを体験できる展示があり、女川の水産業を生かした観光施設だった。シーパルⅡは鮮魚店などが何店舗も営業している水産物流通センターだった。震災後は再開したJR女川駅前に観光拠点施設や商店街が集約された。

#### 1-4 宮城県女川町の東日本大震災被害

女川町編纂の『女川町誌 第三編』<sup>15</sup>と父が避難所で聞いた話から女川町の東日本大震災の被害を振り返る。

女川町では震度6弱を観測した。午後2時49分、気象庁が女川町に大津波警報を発令し、その数十分後、波は大きなうねりとなって町に迫ってきた。女川湾口を超えた津波は、水量、高さ、勢いを加速させながら市街地へ流れ込んだ。マリンパル女川、商工会館、JR女川駅などが次々と津波にのみ込まれ、大津波は海拔16mの高台に建つ町立病院一階天井付近まで駆け上がっていった。

この日、女川を襲った大津波は、午後3時35分ごろの最大津波高が14.8m、最大浸水高が18.5m、最大遡上高34.7mという想像を絶するものであった。また、父が避難所で聞いた話によると地震発生から津波が来るまでの時間はあまりなく、高台にあった町立病院の駐車場に止まっていた車はすべて流されて1台もなくなってしまい、1階にいた看護師らは泳いで2階・3階へ逃げたそう。また、町役場は3階まで水をかぶってしまい宮城県への通信が不能になった。

繰り返し押し寄せる津波と引き波は、町の大半を根こそぎ破壊した。町の基幹

---

<sup>14</sup> 東日本大震災記録誌 p.14 女川町の産業と観光 女川町 東日本大震災記録誌  
([town.onagawa.miyagi.jp](http://town.onagawa.miyagi.jp)) (2023年9月24日参照)

<sup>15</sup> 『女川町誌 第三編』 p.75-76

産業である漁業・水産業は、漁船の約 9 割、水産加工事業所の約 8 割が流出し、約 3 割の経営体が廃業する状況に陥った。また、商工業事業者の 3 割以上が廃業せざるを得ない状況となった。

牡鹿半島の中ほど、太平洋に面して三つの原子炉建屋が並ぶ東北電力女川原子力発電所にも約 13m を超える津波が押し寄せた。しかし、施設の一部に被害はあったものの大事に至ることはなかった。海拔 14.8m の高台に主な施設があったこと、外部電源が確保されたことが福島第一原発とは命運を大きく分けた。

2011 年 3 月 11 日時点での人口は 10,014 人だった。震災による死者は 574 人、震災行方不明者で死亡届が受理された死亡認定者は 253 人となった<sup>16</sup>。住家被害合計は 3,934 棟で全体の 88.9% が被害を受けた。女川町は東日本大震災における被災自治体の中で最も高い被災率となった<sup>17</sup>。2011 年 3 月 13 日には最大 25 カ所の避難所で 5,720 人が避難し、二次避難は延べ 360 人<sup>16</sup>にも及んだ。また、2023 年 10 月 31 日時点の人口は 5,926 人<sup>18</sup>であり、震災前と比較して約 6 割減少し、人口流出の課題も震災を経て一層深刻となった。

「女川町、平地はほぼ壊滅。道路寸断され、孤立」(朝日新聞<sup>19</sup>)

「宮城県内でも被害の深刻な女川」(読売新聞<sup>20</sup>)

「東日本大震災で壊滅的な打撃を受けた宮城県女川町」(毎日新聞<sup>21</sup>)

「大津波に破壊され、がれきと化した町中心部」(河北新報<sup>22</sup>)

---

<sup>16</sup> 女川町観光ガイドブック p.2 震災概要

<sup>17</sup> 『女川町誌 第三編』p.76

<sup>18</sup> 女川町ホームページ 人口統計

人口統計 | 女川町 ([town.onagawa.miyagi.jp](http://town.onagawa.miyagi.jp)) (2023 年 11 月 24 日参照)

<sup>19</sup> 朝日新聞 2011 年 3 月 13 日朝刊 18 面「確認された主な被害状況」(地図)

<sup>20</sup> 読売新聞 2011 年 3 月 18 日東京朝刊 30 面「ボランティア始動 炊き出し、拠点作り 急ピッチ」

<sup>21</sup> 毎日新聞 2011 年 4 月 12 日東京夕刊 1 面「東日本大震災：「転校した友の分まで」-- 宮城・女川で新学期」

<sup>22</sup> 河北新報 2015 年 3 月 20 日朝刊 21 面「あす女川「まちびらき」 希望の産声 もうすぐ 地域の未来 住民育む」

「震災で壊滅的な被害を受けた女川町中心部」(石巻日日新聞<sup>23</sup>)

女川の震災被害を伝える記事で女川がどのような説明がされているか着目し、いくつか挙げてみると、各紙被害の深刻さを伝える文字が並んだ。また、朝日新聞社は空撮した震災 3 日目の女川中心部の被害状況を「巨人が踏みつぶしたように跡形もなく壊滅した宮城県女川町の中心部」と表現した(前掲写真1)。

女川町の被害は「破壊」「壊滅」という言葉で表現するしか方法がない程の大きなものだった。このような甚大な被害を受けた女川町では、住民主体の復興に取り組んでいる。復興庁の復興まちづくり先導事例集で、女川町は復興まちづくりのモデルとなる取り組みを行っている自治体の一つとして取り上げられた<sup>24</sup>。2015 年 3 月に JR 石巻線全線再開と女川駅再開、駅周辺のまちびらきをした女川町中心部エリアの復興を「津波被災地における商業・業務系エリアの復興としてはトップランナー」と評価している。

このように私の家族は被災経験があるが、私自身は被災者ではない立場で、東日本大震災の被災地・女川の復興を見てきた。震災から時間が経とうとも被災地、特に女川を忘れることはなかった。女川が身近という立場だが、私は東京で生まれ育っており、在京メディアの報道から被災地のことを知ることがほとんどだった。東日本大震災後の女川がどのように報じられてきたか、在京メディアと地元被災地メディア、その中でも新聞報道から調査する。

## 2.調査概要

### 2-1 調査内容

前章で私の女川町についての思い、女川町の東日本大震災の被災状況について述べた。女川町は震災によって、かつての女川を失った。また、町中心部は海の近くの平地にあるため町としての機能のほとんどを失った。しかし女川町は

---

<sup>23</sup> 石巻日日新聞 2015 年 12 月 24 日 1 面「復興のトップランナー躍動 海に見える商業エリア誕生 女川まちびらき第 2 弾 シーパルピア&交流館」

<sup>24</sup> 復興庁 「がんばれ復興!! まちづくりトップランナー(復興まちづくり先導事例集)」p.9 [復興庁 | がんばれ復興!! まちづくりトップランナー \(reconstruction.go.jp\)](https://www.reconstruction.go.jp/) (2023 年 10 月 24 日参照)

復興が他の被災地よりも早く、復興のトップランナーと言われることもある。女川町ではどのように復興してきたのか。女川の震災前の姿や、震災後の復興を定点観測的に見てきた立場で、女川の震災被害や復興が新聞ではどのように報じられてきたか、調査する。

新聞には全国紙・地方紙・地域紙の3つの層がある。今回は各紙の女川に関する東日本大震災報道の違いを調査する。新聞では重要度の高い記事が1面に載るため調査では1面を対象にした。全国紙は毎日新聞、地方紙は河北新報、地域紙は石巻日日新聞を調査対象にする。

各新聞がターゲットとする読者は異なるため、報道の傾向に特徴が見られるだろう。震災直後から11年間の紙面を調査し、時の経過による報道の変遷を明らかにする。また報道傾向を東日本大震災の女川町に関する報道に絞って調査し、災害報道における全国紙・地方紙・地域紙の報道使命について考える。

## 2-2 調査方法

### 〔調査対象紙 概要〕

#### ・全国紙：毎日新聞

1872年2月21日東京日日新聞（東京で最初の日刊紙、毎日新聞の前身）は浅草で創刊した。1875年、新聞の戸別配達を世界で初めて実施した<sup>25</sup>。2023年のデータでは、全国で1,778,971部（朝刊）（朝刊セット1,537,083部、夕刊511,648部）販売されており、朝刊（推定）総到達読者数は3,593,521人<sup>26</sup>に上る。

#### ・地方紙：河北新報<sup>27</sup>

宮城県を中心に東北6県を発行区域とする東北地方を代表とする地域ブロッ

---

<sup>25</sup> 毎日新聞営業総本部ポータルサイト 毎日新聞社の歩み 毎日新聞とは | 毎日新聞社 営業総本部ポータルサイト ([mainichi.co.jp](http://mainichi.co.jp)) (2023年9月27日閲覧)

<sup>26</sup> 毎日新聞営業総本部ポータルサイト 全国の配布エリアと販売部数 配布エリア・販売部数 | 毎日新聞社 営業総本部ポータルサイト ([mainichi.co.jp](http://mainichi.co.jp)) (2023年10月24日閲覧)

<sup>27</sup> 『河北新報のいちばん長い日 震災下の地元紙』p.27-28

ク紙である。1897（明治 30 年）、一力健治郎が創刊した。題号は、東北が明治維新後に「白河以北一山百文」と軽視されたことに反発し、東北復権の願いを含めあえて「河北」を題字に定めた。

東北 6 県の発行部数は 2021 年のデータでは、朝刊 392,299 部、夕刊 35,784 部に上る。宮城県の推定読者数は 848,278 人で、宮城県で最も多く読まれている新聞である。県内発行部数は 385,581 部、県内シェアは 73.68%<sup>28</sup>となっている。

・地域紙：石巻日日新聞

1912 年創刊の夕刊紙である。宮城県東部の石巻地域（石巻市・東松島市・牡鹿郡女川町）（図 2<sup>29</sup>）をエリアとして発行している地域紙で、発行部数は約 14,000 部（大震災前の数字）だった<sup>30</sup>。

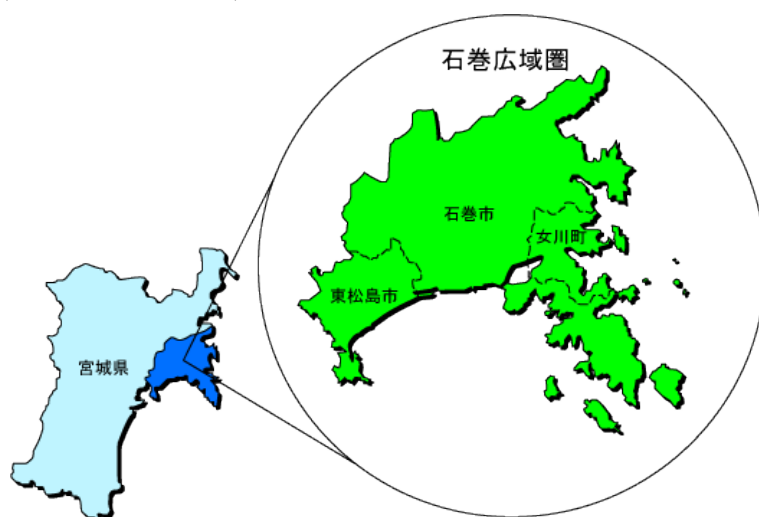


図 2 石巻地域

石巻日日新聞社は東日本大震災直後から停電、断水となり輪転機を動かすことができなかった。そのため、号外として 3 月 12 日から 17 日まで新聞用紙と

---

<sup>28</sup> 河北新報媒体情報 1P 河北新報 媒体情報 ([kahoku.co.jp](http://kahoku.co.jp)) (2023 年 11 月 24 日最終閲覧)

<sup>29</sup> 石巻地区広域行政事務組合ホームページ 圏域の概要 [石巻地区広域行政事務組合【石巻圏域の概要：石巻広域圏のあらまし】](http://ikouiki.or.jp) ([ikouiki.or.jp](http://ikouiki.or.jp)) (2023 年 11 月 13 日閲覧)

<sup>30</sup> 『6 枚の壁新聞 石巻日日新聞・東日本大震災後 7 日間の記録』奥付

フェルトペンを使い記事を書き壁新聞を発行し、石巻地域の被害・ライフラインの復旧状況を伝えた。これらの号外はワシントンのニュージアムに収蔵されていた<sup>31</sup>。

### 【調査条件】

すべての新聞で2011年3月11日から2022年8月31日の1面掲載記事を紙面調査の対象とする。国会図書館で閲覧することができる石巻日日新聞が2022年8月31日分までだったため、この期間に毎日新聞、河北新報も合わせることにする。

この期間の3紙の1面で東日本大震災の女川に関する記事をピックアップし、記事の内容を以下の11種類に分け、集計した。

#### 【記事の主な内容】

- ・復旧：がれき処理、インフラの復旧など
- ・復興：復興に関するものとしてさらに5つの項目に分けた
  - まちづくり…ゼロから町を作る復興における町づくり
  - 水産…主要産業である水産の復興
  - 観光…復興イベントや祭りなど
  - 伝承…震災の被害を後世に伝えるもの  
(震災遺構、慰霊碑、いのちの石碑計画など)
  - 他…上記以外の復興に関する記事(政治家の来町、視察など)
- ・体験談：住民の震災体験
- ・原発：女川原発に関するものすべて  
(被害や復興等問わず余震の被害の有無を伝えるもの等も含んだ)
- ・被害：東日本大震災によって起こった被害  
(災害による直接的なものや余震の他に、震災後時間が経ってから明らかとなった人的被害も含めた。また、被害まとめ情報や新聞社の調査で分かった被害なども含めた)

---

<sup>31</sup> 石巻日日新聞 2011年5月3日1面「震災伝えた壁新聞 日日新聞号外米国博物館に収蔵」

- ・ 追悼：追悼式について
- ・ 他：上記分類に入らないもの（例：七十七銀行女川支店訴訟）

#### ・ 毎日新聞

新聞データベース「毎索」を使用する。以下の検索条件で検索すると東日本大震災に関係のない記事（例：台風など他の災害の記事）も一部該当してしまうため、検索結果から該当記事を読み、東日本大震災に関する記事のみ集計した。

##### 【データベース検索条件】

- ・ キーワード：女川
- ・ 日付：2011（平成 23）年 3 月 11 日から 2022（令和 4 年）8 月 31 日
- ・ 面種：東京朝刊、東京夕刊
- ・ 面名：一面

#### ・ 河北新報

河北新報データベースの利用と紙面を読み女川町の東日本大震災に関する記事を集計した。2011 年 3 月 11 日から 2012 年 1 月 22 日は河北新報データベース検索で面数を指定して検索することができなかったため、この期間はすべての日の一面を読み、集計した。2012 年 1 月 23 日以降は毎日新聞と同様に新聞データベースで検索し、検索結果から該当記事を読み、東日本大震災に関係のある記事のみを集計した。

##### 【データベース検索条件】

- ・ キーワード：女川（AND）[一般用語：東日本大震災]  
（…河北新報記事分類で、東日本大震災が主題の記事）
- ・ 期間：2012 年 1 月 23 日から 2022 年 8 月 31 日
- ・ 地域＞宮城・沿岸
- ・ 1 ページ
- ・ 河北新報のみ（石巻かほく、こども新聞は除いた）

#### ・ 石巻日日新聞

毎日新聞・河北新報の様な新聞データベースはないため、国会図書館で 2011 年 3 月 11 日から 2022 年 8 月 31 日までの休刊日を除く 1 面をすべて閲覧し集計した。2023 年 5 月以降分は資料を請求すれば利用できるが、調査開始した 2023 年 8 月時点では 2022 年 9 月から 2023 年 4 月までは未製本のため資料の利用と調査ができなかった。そのため 2022 年 8 月分までの 1 面調査とした。

### 3.調査結果

震災から半年後の 2011 年 9 月、「女川町復興計画」が町議会で議決された。女川町復興計画は 8 年間で計画され、2011 年度～2012 年度を復旧期、2013 年度～2015 年度を基盤整備期、2016 年度～2018 年度を本格復興期とした。また、8 年間の女川町復興計画後のまちづくり計画として、「女川町総合計画 2019」が制定された。須田女川町長は 2018 年 3 月 5 日 1 面の新聞連載「復興の階段」で、「この 8 年間の復興計画が終了したからと言ってすべて復興が完了するわけではない。8 年間の復興計画によって平成 30 年度が基盤整備の面で一つの区切りになる。大事なはその先だ」<sup>32</sup>と述べている。このことから、2018 年度の 8 年間の復興計画が終了した先の紙面についても調査し分析するべきだと考えた。本調査では 2019 年度以降の期間を「総合計画期」とした。

#### ・「女川町総合計画 2019」<sup>33</sup>

女川町では 2001 年度から 2010 年度までの 10 年間を計画期間とした「第 4 次女川町長期発展計画」を策定し、次の 10 年間の指針となる「第 5 次女川町長期発展計画」の策定に向けた検討を進めていた。しかし 2011 年 3 月 11 日の東日本大震災の発生により、検討を進めていた発展計画を推進することが非常に困難な状況になった。そのためできるだけ早期に復興を成し遂げることを目標とした「女川町復興計画」が策定された。復興計画の目的はおおむね計画期間内に終了し、一部の事業は、次の「女川町総合計画 2019」に引き継がれた。総合

---

<sup>32</sup> 石巻日日新聞 2018 年 3 月 5 日 1 面「復興の階段 めどついた住宅整備 常に将来を意識して施策推進 オール町民が主役の町に 須田善明女川町長 現在は 8 段目」

<sup>33</sup> 『女川町復興記録誌 2011-2021』（令和 3 年 3 月）p.236 「1 序論 総合計画の役割」女川町復興記録誌 2011-2021 ([town.onagawa.miyagi.jp](http://town.onagawa.miyagi.jp)) （2023 年 10 月 24 日閲覧）

計画は、女川町の総合的・計画的な行政運営の指針を示し、町民に復興計画以後のまちづくりの長期的な展望を示す。町内外の情勢の変化と、今後 10 年を見据えた持続可能なまちづくりと行政運営の指針を示した。

「女川町復興計画」8 年間（2011 年度～2018 年度の 3 期間）と 2019 年度からの「女川町総合計画 2019」（2019 年度～）の 4 期間に分けて紙面調査の結果をまとめる。また、[調査条件]にも示したように記事を 11 種類（復旧、復興（まちづくり・水産・観光・伝承・他）、体験談、原発、被害、追悼、他）に分類して集計した。

また、東日本大震災以降の女川の復興の歩みを年表 1 にまとめた。『女川町復興記念誌 2011－2021』、『女川町 東日本大震災記録誌』、広報おながわ、『女川町誌 第三編』を参考に作成した。

| 期間    | 年     | 月日     | 主な出来事                                                                   |
|-------|-------|--------|-------------------------------------------------------------------------|
| 復旧期   | 2011年 | 3月11日  | 14時46分 地震発生、15時20分 大津波第一波（最大津波高14.8m 最大遡上高34.7m 浸水域3.2km <sup>2</sup> ） |
|       |       | 4月7日   | 23時32分 女川最大余震 宮城県沖地震（M7.2 最大震度6強 女川震度6弱）                                |
|       |       | 4月22日  | 女川さいがいFM放送開始                                                            |
|       |       | 7月1日   | 女川魚市場再開、仮設商店街「女川コンテナ村商店街」オープン                                           |
|       |       | 9月     | 女川町復興計画が町議会で議決される                                                       |
|       |       | 12月    | 女川町中心市街地復興構想の原案が示される                                                    |
|       | 2012年 | 1月     | 女川町復興まちづくり説明会開催                                                         |
|       |       | 3月1日   | 女川町で発生した災害廃棄物の東京への搬出が本格的にスタート                                           |
|       |       | 3月17日  | JR石巻線 石巻～渡波間 運転再開                                                       |
|       |       | 3月18日  | 第1回目となる「女川町商店街復興祭」を女川町総合運動場で開催                                          |
|       |       | 4月29日  | きぼうのかね商店街（女川高校グラウンド内）オープン                                               |
|       |       | 6月     | 女川町まちづくりワーキンググループが始まる                                                   |
|       |       | 7月19日  | 女川町とUR都市機構が「女川町復興まちづくり事業協定」に調印                                          |
|       |       | 9月29日  | 女川町復興まちづくり事業着工式                                                         |
|       |       | 10月13日 | カタール国から支援を受けた多機能水産加工施設（冷凍冷蔵庫）「マスカー」が完成                                  |
|       |       | 12月7日  | 牡鹿半島沖でM7.3の地震が発生 宮城県に津波警報発令 広い範囲で震度5弱を記録（女川町震度4）                        |
|       |       | 12月27日 | トレーラーハウス宿泊村「エルファロ」オープン                                                  |
|       | 2013年 | 春      | 町中心部の嵩上げ工事スタート 4月、中心部地区土地区画整理事業（JR女川駅周辺エリア）                             |
|       |       | 3月16日  | JR石巻線 渡波～浦宿間 運転再開                                                       |
|       |       | 5月12日  | 安倍首相が東松島市・女川町を訪問                                                        |
|       |       | 11月23日 | 女川中学校において「いのちの石碑」除幕式                                                    |
| 基盤整備期 |       | 11月27日 | 「震災遺構の保存方針」について須田町長が記者会見                                                |
|       | 2014年 | 3月3日   | 震災遺構の候補となっていた女川サプリメントの解体始まる                                             |
|       |       | 3月28日  | 女川町営運動公園住宅（災害公営住宅）竣工式                                                   |
|       |       | 7月12日  | 福島県沖でM7の地震発生 広い範囲で最大震度4を記録 津波注意報が発令される 20cmの津波到達                        |
|       |       | 11月26日 | 津波記憶石除幕式                                                                |
|       |       | 12月15日 | 「江島共済会館」（震災遺構候補）解体開始、仮設商店街「女川コンテナ村商店街」営業終了                              |
|       | 2015年 | 3月21日  | JR石巻線全線運転再開、「おながわ復興まちびらき」開催                                             |
|       |       | 3月22日  | 「女川温泉ゆばば」オープン                                                           |
|       |       | 10月4日  | 三陸自動車道石巻女川インターチェンジ「県道石巻女川インター線」開通                                       |
|       |       | 12月23日 | 女川駅前商業エリア開業（女川町まちなか交流館、シーバルピア女川）                                        |
|       | 2016年 | 3月17日  | 天皇皇后両陛下が女川町を行幸啓された                                                      |
|       |       | 3月29日  | 女川さいがいFM放送終了                                                            |
| 本格復興期 |       | 8月6日   | JR仙石東北ライン「女川～仙台間」直通運転開始（上り始発と下り最終列車）                                    |
|       |       | 12月23日 | 地元市場「ハマテラス」オープン                                                         |
|       | 2017年 | 5月9日   | 女川町地方卸売市場完成、全面供用開始                                                      |
|       |       | 8月5日   | トレーラーハウス宿泊村「エルファロ」再開（清水地区から女川駅南側へ移設）                                    |
|       |       | 9月30日  | 「きぼうのかね商店街」女川高等学校校庭跡地での営業終了                                             |
|       | 2018年 | 4月18日  | 女川町災害公営住宅整備事業完了式典                                                       |
|       |       | 6月15日  | 女川駅前レンガみち周辺地区が都市景観大賞を受賞                                                 |
|       |       | 6月29日  | 災害公営住宅「大原住宅」が全建賞を受賞                                                     |
|       |       | 9月25日  | 新庁舎で役場業務を開始                                                             |
|       |       | 10月1日  | 女川町役場新庁舎開庁、「女川町東日本大震災慰霊碑」除幕式                                            |
|       |       | 10月25日 | 東北電力が女川原子力発電所1号機の「廃止」を決定                                                |
|       |       | 11月    | 女川駅前エリアがグッドデザイン賞＆アジア都市景観賞受賞                                             |
|       |       | 12月21日 | 女川原子力発電所1号機の運転終了                                                        |
|       | 2019年 | 3月24日  | 女川町復興祭＆津波伝承「復幸男」開催（復興祭としては最後）                                           |
|       |       | 3月     | 「女川町総合計画2019」策定                                                         |
| 総合計画期 | 2020年 | 2月29日  | 東日本大震災遺構（旧女川交番）完工式開催                                                    |
|       |       | 7月15日  | 女川小中一貫校工事完了                                                             |
|       | 2021年 | 2月13日  | 23時18分 福島県沖地震発生 M7.3 最大震度6強（女川町震度4）                                     |
|       |       | 3月20日  | 18時09分 宮城県沖地震発生 M6.9 最大震度5強（女川町震度4）                                     |
|       |       | 4月3日   | 道の駅おながわ（シーバルピア女川・ハマテラス周辺エリア）開業式開催                                       |
|       |       | 11月21日 | いのちの石碑21基完成                                                             |
|       | 2022年 | 3月24日  | 石巻女川線浦宿橋開通式                                                             |
|       |       | 7月24日  | 第55回おながわみなと祭り開催（震災以来12年ぶりの復活）                                           |

年表 1 東日本大震災以降の女川町

### 3-1 復旧期（2011 年度～2012 年度）

女川町復興計画が開始されたのは 2011 年 9 月からであるが、紙面調査では 2011 年 3 月 11 日から調査対象と調査しているため、調査では 2010 年度 3 月（2011 年 3 月）から 2011 年 8 月の記事も復旧期に含んだ。

復旧期は、被害を受けゼロからの復興に向けての期間である。この期間の女川の東日本大震災に関する記事の件数は、毎日新聞 34 件、河北新報 126 件、石巻日日新聞 135 件だった。（表 1）（網掛けは復興の内訳である。まち・水産・観光・伝承・他の合計が復興の値となる）

|     | 毎日 | 河北  | 日日  | 計   |
|-----|----|-----|-----|-----|
| 復旧  | 2  | 9   | 4   | 15  |
| 復興  | 10 | 59  | 105 | 174 |
| まち  | 4  | 24  | 58  | 86  |
| 水産  | 2  | 9   | 14  | 25  |
| 観光  | 0  | 0   | 5   | 5   |
| 伝承  | 0  | 6   | 0   | 6   |
| 他   | 4  | 20  | 28  | 52  |
| 体験談 | 2  | 3   | 4   | 9   |
| 原発  | 9  | 23  | 8   | 40  |
| 被害  | 10 | 26  | 7   | 43  |
| 追悼  | 0  | 1   | 2   | 3   |
| 他   | 1  | 5   | 5   | 11  |
| 計   | 34 | 126 | 135 | 295 |

表 1 復旧期  
女川の新聞記事件数

この期間の中心になっている記事は、被害や復興についてである。他の期間には復旧に関する記事はないため、復旧期の記事の特徴である。「被害」には余震による被害も含んでいる。2011 年 4 月 7 日、2012 年 12 月 7 日に大きな余震があったこともあり被害記事の件数が増えた。また、「被害」には震災後少し時間が経過し、調査によって明らかになった被害も含んだ。復旧期ではその例の一つに「不明者 3250 人 死亡届受理 被災 3 県 石巻 560 人、大槌 503 人」（河北新報 2011 年 9 月 7 日 1 面）が挙げられる。

毎日新聞の記事件数は河北新報、石巻日日新聞に比べて 3 分の 1 ほどで、新聞によって件数の差が大きい。

河北新報も復興記事が多いが、3 紙で比較すると原発の記事が多いことが特徴だと言える。河北新報は東北の地方紙であるからだと考えられる。東日本大震災では東京電力福島第一原子力発電所で原発事故が起きた。女川原発は福島第一原発のような事故は起こさなかったが被災原発である。河北新報は事故が起きた福島第一原発が立地する東北の新聞社として福島第一原発事故問題だけでなく女川原発についても震災直後から取り上げている。

石巻日日新聞は地域の復興を中心に伝える。石巻日日新聞では読者である地域住民も多くが被災者である。被災者にとって必要な住環境の復興情報を中心

に伝える。

復旧期の「まちづくり」に関する記事は、石巻日日新聞ではまちづくりの住民説明会に関する内容の記事が多い。河北新報の最初のまちづくりに関する記事は 2011 年 4 月 1 日の仮設住宅着工についての県の方針の記事だった。石巻日日新聞も河北新報と同じ頃の 4 月 9 日に県が発表した仮設住宅建設予定の記事が最初のまちづくりに関する記事だった。毎日新聞の最初のまちづくりに関する記事は震災から 7 か月後の 2011 年 10 月 12 日の仮設住宅への引っ越しの記事だった。

2011 年 4 月 11 日までの震災後 1 か月間に結果を絞ると、女川の記事は毎日新聞 7 件、河北新報は 15 件、石巻日日新聞は 9 件だった。河北新報が一番多く、石巻日日新聞と毎日新聞は件数があまり変わらない。河北新報は毎日新聞、石巻日日新聞と比較して被害を伝える記事が多い。震災直後、復旧に関する女川を伝える記事が他紙より多い。

復旧期で震災の伝承に関する記事があったのは河北新報だけだった。宮城県内では震災遺構保存に関する動きがあり女川町の遺構候補も話題に上がっていた。震災遺構の保存についての記事、「証言 3・11 大震災」の連載の女川で被災した人の話、教訓として伝える「焦点 3・11 大震災」で学校避難について情報を人づてにつないだ自治体の話として女川に関する伝承記事があった。2011 年夏の段階で、「証言 3・11 大震災」や「焦点 3・11 大震災」の連載で東日本大震災の検証しているのは河北新報の特徴と言えるだろう。

1 面の観光に関する記事は石巻日日新聞だけだった。2011 年 5 月・2012 年 3 月に開催された「復幸市」や同年 10 月の「サンマ収穫祭」など石巻日日新聞では震災発生からまもない被災地でのイベント開催の様子を報じた。震災の被害を伝えるものや、震災の辛い記憶を思い出させるような記事が中心になる時期だが、前を向いて生きる地域住民の姿を被災地の明るいニュースとして伝えた。

### 3-2 基盤整備期（2013 年度～2015 年度）

基盤整備期は復旧を終え、復興に向けて少しずつ進み始めた期間である。この期間の女川の東日本大震災に関する記事は、毎日新聞 21 件、河北新報 97 件、石巻日日新聞 198 件だった。（表 2）

基盤整備期の記事の中心は復興だ。基盤整備期の女川の大きな出来事を挙げるとすれば、2015 年 3 月の JR 石巻線の全線開通と女川駅の再開と女川のまちびらきだろう。町の復興、被災地の復興を象徴する明るい出来事だと言える。女川まちびらきについては、女川の復興において重要な出来事であると考えするため 4 章で紙面比較する。

石巻日日新聞 2013 年 12 月 30 日 1 面の 2013 年振り返りインタビューの記事で須田女川町長は「水産と観光のまちの再興に向けた年だった」と述べている。この発言からも分かるように、復旧期と比較して、まちづくりに関する記事の他に水産業の復興や観光に関する記事が増加した。復旧期も復興の記事は多かったが石巻日日新聞では復旧期と比較して復興の記事件数が大幅に増加した。基盤整備期は魚市場や水産加工施設の再建が相次いだため多く 1 面で伝えられた。石巻日日新聞では石巻地域の水産業の復興に関する記事が 1 面になることが多いが、河北新報や毎日新聞では圧倒的に少ない。

河北新報で観光記事が多いが、ツール・ド・東北（河北新報社とヤフーが主催の東北沿岸被災地を自転車で走るイベント）が開催された。そのため河北新報ではイベント開催に関する観光記事が増加した。

また、2014 年 12 月には女川町がまとめた「まちなか再生計画」が復興庁に認定され、さらなる復興の加速化が期待された。1-4 で女川町が「復興のトップランナー」であると復興庁から評価されたと述べた。2015 年 12 月 24 日 1 面に石巻日日新聞で初めて、「復興のトップランナー」という言葉が女川町を説明する言葉として登場した。また、河北新報の女川まちびらきを伝える特集の中にも、

|     | 毎日 | 河北 | 日日  | 計   |
|-----|----|----|-----|-----|
| 復旧  | 0  | 0  | 0   | 0   |
| 復興  | 12 | 63 | 178 | 253 |
| まち  | 2  | 21 | 88  | 111 |
| 水産  | 2  | 1  | 19  | 22  |
| 観光  | 0  | 13 | 9   | 22  |
| 伝承  | 1  | 3  | 10  | 14  |
| 他   | 7  | 25 | 52  | 84  |
| 体験談 | 0  | 2  | 1   | 3   |
| 原発  | 5  | 13 | 13  | 31  |
| 被害  | 0  | 6  | 0   | 6   |
| 追悼  | 0  | 0  | 4   | 4   |
| 他   | 4  | 13 | 2   | 19  |
| 計   | 21 | 97 | 198 | 316 |

表 2 基盤整備期  
女川の新聞記事件数

「国が「復興のトップランナー」と評する町<sup>34</sup>」の表現があった。本格復興期に向けて復興の基盤が出来上がった期間だと記事からも読み取れる。

### 3-3 本格復興期（2016 年度～2018 年度）

女川は 2015 年 3 月のまちびらきを経て、2016 年 8 月には仙石東北ラインが石巻線に乗り入れ、震災前から町の悲願だった仙台－女川間の直通運転が開始された。本格復興期は町の復興が勢いづいた。

本格復興期の女川に関する記事の件数は、毎日新聞 4 件、河北新報 75 件、石巻日日新聞 181 件だった。（表 3）

震災復興計画を 10 年とする自治体が多い中、女川町は 8 年間で復興期間とした。他の被災自治体よりも復興計画の期間が短く、一足早く復興の最終年度を迎える。本格復興期の 2018 年度は 8 年間の女川町の復興計画の最終年度であり、女川町にとって復興のラストスパートとなる年だ。その 2018 年度に絞って結果をみると毎日新聞は 2 件、河北新報は 30 件、石巻日日新聞は 77 件だった。2016 年度・2017 年度と比較して毎日新聞はほぼ同じ件数だった。河北新報は約 1.3 倍、石巻日日新聞は約 1.5 倍に記事が増加した。

石巻日日新聞では被災地のメディアとして女川の復興状況を伝える内容が増えた。記事の内容も復興に関する記事が多く、計画上は復興を終えることになるため関心を集めていると考えられる。石巻地域他の 2 市（石巻、東松島）の復興計画は 10 年で、被害状況や復興の進め方も異なる。交流が深い地域同士の比較をするためにも女川の復興最終年度を伝えると考えられる。石巻日日新聞の「復興最終年度」を強調した記事は年度初め、年末、年度の終わり・復興計画期間の終了に集中した。1 年の中でも区切りとなる時期に復興を振り返る形式で復興最

|     | 毎日 | 河北 | 日日  | 計   |
|-----|----|----|-----|-----|
| 復旧  | 0  | 0  | 0   | 0   |
| 復興  | 2  | 47 | 155 | 204 |
| まち  | 0  | 16 | 54  | 70  |
| 水産  | 0  | 2  | 21  | 23  |
| 観光  | 0  | 13 | 19  | 32  |
| 伝承  | 0  | 3  | 7   | 10  |
| 他   | 2  | 13 | 54  | 69  |
| 体験談 | 0  | 0  | 0   | 0   |
| 原発  | 1  | 24 | 18  | 43  |
| 被害  | 0  | 1  | 1   | 2   |
| 追悼  | 0  | 0  | 3   | 3   |
| 他   | 1  | 3  | 4   | 8   |
| 計   | 4  | 75 | 181 | 260 |

表 3 本格復興期  
女川の新聞記事件数

<sup>34</sup> 河北新報 2015 年 3 月 20 日 19 面「女川復興へ確かな一歩 中心市街地ににぎわい空間あす「まちびらき」 JR 石巻線全線再開」

終年度について記事が書かれた。

石巻日日新聞では追悼式の様子を伝える記事や年末回顧など 3 市町について伝える殆どの記事で「石巻市→東松島市→女川町」の順で 3 市町それぞれの情報が紙面で伝えられる。石巻日日新聞の 1 面復興報道には「復興の階段」という他紙にはない特徴的な連載がある。この連載は、石巻地域 3 首長や地域住民へのインタビューから成る。一日一人のインタビューで一人一人の話が詳細に書かれる。インタビューでは「復興の階段が 10 段あるとして地域・あなたは現在何段目か」という質問が必ずされる。2015 年から 2021 年まで毎年 2 月から 3 月にかけてこの連載名で 1 面に掲載された(震災 10 年の年は 9 月にもあった)。しかし、2018 年 3 月の「復興の階段」の連載は初日が女川町長、2 日目が東松島市長、3 日目が石巻市長へのインタビューだった。今回の紙面調査で確認できた範囲では、石巻日日新聞で「石巻、東松島、女川」の順が変わったのは 2018 年の「復興の階段」の連載だけだった。女川の復興計画最終年度が始まることを意識してのことだろう。

河北新報は「復興最終年度の女川」よりも、原発関連の記事が多い。2018 年 12 月 21 日、女川原発 1 号機が廃炉となったため、原発に関する記事が多く、連載「揺らぐ原発城下町」などで伝えた。河北新報は、他の被災自治体の復興状況とともに、復興最終年度に限らず復興報道をしている為、2018 年度が女川町の復興計画では復興最終年度だから特別に記事が増えるわけでもない。復興最終年度よりも原発問題を多く取り上げた。

毎日新聞は本格復興期の記事は 4 件と少なかった。4 件の中に女川の復興計画最終段階に関するものはなかった。

### 3-4 総合計画期（2019 年度～2022 年 8 月）

総合計画期は、本格復興期までの女川町復興計画で整えてきたハード面を生かした地域振興に移行する期間である。2021 年 3 月 11 日は震災から 10 年でもあり、報道に変化はあっただろうか。

女川町総合計画 2019 が始まった 2019 年度から今回の調査対象期間とした 2022 年 8 月までの女川に関する記事の件数は、毎日新聞 18 件、河北新報 44 件、石巻日日新聞 137 件だった。（表 4）

追悼式報道についてここで取り上げたい。2020 年 1 月、内閣官房長官記者会見にて政府として行う追悼式は震災から 10 年まで実施したい旨の発言があった<sup>35</sup>。震災から 11 年となった 2022 年、女川町は式典を開催しなかった。この年は被災 3 県の自治体でも追悼式開催について意見が分かれた。他の石巻地方 2 市（石巻市、東松島市）では式典が行われたが女川町は自由献花「追悼のつどい」として追悼の場を設置することを決めたと石巻日日新聞で報じられた<sup>36</sup>。女川町は、まちづくりと同様に町民の意見を反映して決定した。10 年という時間が流れ、被災地に住む人の中でも震災に対する考え方が変わってきたのだろう。

石巻日日新聞だけを読むと、追悼式を実施しなかった女川町が例外的に見えた。河北新報の追悼式実施に関する記事<sup>37</sup>では、河北新報社が岩手・宮城・福島自治体にアンケートをとった。宮城沿岸 13 市町のアンケートの結果、実施するとしたのは仙台市、石巻市、東松島市だけで、他 10 市町は開催しないと回答

|     | 毎日 | 河北 | 日日  | 計   |
|-----|----|----|-----|-----|
| 復旧  | 0  | 0  | 0   | 0   |
| 復興  | 4  | 25 | 90  | 119 |
| まち  | 1  | 6  | 25  | 32  |
| 水産  | 0  | 2  | 11  | 13  |
| 観光  | 0  | 3  | 13  | 16  |
| 伝承  | 2  | 1  | 3   | 6   |
| 他   | 1  | 13 | 38  | 52  |
| 体験談 | 0  | 2  | 2   | 4   |
| 原発  | 14 | 15 | 37  | 66  |
| 被害  | 0  | 1  | 1   | 2   |
| 追悼  | 0  | 1  | 5   | 6   |
| 他   | 0  | 0  | 2   | 2   |
| 計   | 18 | 44 | 137 | 199 |

表 4 総合計画期  
女川の新開記事件数

<sup>35</sup> 首相官邸 ホームページ 内閣官房長官記者会見 令和 2 年 1 月 21 日（火）午前 | 令和 2 年 | 官房長官記者会見 | ニュース | 首相官邸ホームページ (kantei.go.jp) （2023 年 11 月 11 日閲覧）

<sup>36</sup> 石巻日日新聞 2022 年 2 月 7 日 1 面「震災 11 年 式典行わず 女川・自由献花で追悼町内の声聞いて判断」

<sup>37</sup> 河北新報 2022 年 2 月 6 日朝刊 1 面「東日本大震災 10 年 11 カ月：3.11 追悼式典 宮城 10 市町開催せず 岩手、福島大半が継続 節目過ぎ 内容見直し進む」

した。岩手・福島は大半の自治体が継続するとした。河北新報を読むと、宮城の沿岸被災自治体では式典を行わない自治体も多いことが分かる。石巻地域に絞った石巻日日新聞と被災 3 県で調査した河北新報で、追悼式への対応の報道の印象が異なる。

総合計画期で復興の次に件数を占めていた記事は原発記事だった。毎日新聞では 18 件中 14 件（77.7%）、河北新報では 44 件中 15 件（34.0%）、石巻日日新聞では 137 件中 37 件（27.0%）だった。毎日新聞は原発再稼働について重点的に報道しており割合が一番高い。石巻日日新聞は件数では他 2 紙の 2 倍以上で 3 紙の中で一番多いが、割合で見ると、27.0%で一番低い。河北新報・石巻日日新聞の総合計画期の 1 面の女川の記事の原発記事の割合に大差はない。女川原発 2 号機は 2019 年 11 月に原子力規制委員会の再稼働前提の審査に合格し、2 号機再稼働への動きが活発化した。この女川 2 号機再稼働については 3 紙で 1 面記事になっていたため、4 章の紙面比較で詳述する。

河北新報は「焦点 東日本大震災 10 年」など 1 面で独自調査記事を持つことが多い。連載が多く継続的な視点で追いかける報道スタイルが特徴だ。2021 年は震災から 10 年であるため、10 年間の復興を再検証する特集記事が組まれた。

また、2020 年頃からはコロナの感染拡大により 1 面で扱う記事の種類はこれまでと大きく変わった。河北新報・石巻日日新聞でも震災関連が減少し、県内・石巻地域のコロナ感染者数、ワクチン接種情報などが 1 面記事の中心になることが増加した。毎日新聞では東京での感染拡大を伝える記事が中心に変わった。

### 3-5 4192 日の新聞報道

今回の紙面調査の対象とした期間（2011 年 3 月 11 日～2022 年 8 月 31 日は 11 年 5 カ月 21 日で 4192 日である）の一面に掲載された女川町の東日本大震災に関する記事は、毎日新聞 77 件、河北新報 342 件、石巻日日新聞 651 件だった。

記事件数の推移に着目すると、毎日新聞 34→21→4→18（件）、河北新報 126

→97→75→44（件）、石巻日日新聞 135→198→181→137（件）だった。（それぞれ復旧期→基盤整備期→本格復興期→総合計画期の順）紙面調査前は震災発生から時間が経つにつれ記事の件数は減少する傾向だと予想していたが、結果を見ると河北新報以外は増加する期間があることが明らかになった。

毎日新聞では総合計画期（2019 年度～2022 年 8 月）に件数が増えている（本格復興期が 4 件だったが、総合計画期は 18 件に増加した）。18 件のうち 14 件が原発再稼働の記事だったことについては 3-4 総合計画期の結果で述べた。

また、基盤整備期には石巻日日新聞で件数が増えている（復旧期が 134 件だったが、基盤整備期には 194 件に増加した）。石巻日日新聞の報道対象の中心エリアとなっている石巻地域は宮城県沿岸自治体であり、県内でも津波の被害を大きく受けた地域である。そのため地域内の復興状況を伝える記事が多い。壊滅的被害を受けた地域では、住民が再び生活できるようになるための生活基盤をゼロから作り直す必要がある。石巻日日新聞ではまちづくりに関する住民説明会開催のお知らせ、説明会の取材など地域住民に知らせる必要があるものが多く、河北新報や毎日新聞では 1 面記事になっていない種類の記事が多い。

地元の新聞 2 紙には報道の違いがある。河北新報は東北のブロック紙・地方紙であり、1 面トップに自社調査で明らかになったことについて報じること多い。そのため、女川の情報を記事にするとき、「被災 3 県」「宮城沿岸 15 市町」「被災自治体」など一つの自治体として女川のデータが出る記事が多かった。石巻日日新聞は石巻地域 3 市町のニュースがほとんどで、地域の出来事や声を伝えている。あるニュースについて 3 市町の状況をそれぞれ伝える紙面構成が多い。

| 年    | 町長                          | 住民                                                      |
|------|-----------------------------|---------------------------------------------------------|
| 2015 | 4段目                         | 3段目（女川町清水仮設団地自治会長 高橋義弘さん）                               |
| 2016 | 5段目                         | 3段目（震災時女川交番で勤務 松田博さん）                                   |
|      |                             | 4-5段目（一般社団法人フィッシャーマン・ジャパン理事 鈴木真悟さん）                     |
| 2017 | 7段目                         | —<br>（この年は住民への「復興の階段」はなく、住民の思いを聞いた「あの日から6年 そして今」の連載だった） |
| 2018 | 8段目                         | —（女川町民はなかった）                                            |
| 2019 | 9段目                         | 7.1段目（町内で焼肉店を経営する金山英勲さん）                                |
| 2020 | 9.5段目                       | 段数なし（震災時大崎市在住、現在は女川で保育士 栗野祥子さん）                         |
| 2021 | 10段目からさらに上へ<br>（点数では98点くらい） | 5段目（元・女川町立病院総看護師長 高橋洋子さん）                               |

表5 「復興の階段」で回答した段数

3-3 本格復興期の結果でも述べたが、石巻日日新聞の連載「復興の階段」では復興のゴールまでは“階段”と“踊り場”の連続であるとし、「復興の階段が10段あるとして地域・あなたは現在何段目か」の質問がされる。ここで首長の回答と住民の回答に差があり、復興度合いの体感が人によって異なることが読み取れる。女川町の「復興の階段」での回答を表5に示した。回答した段数の差が最も大きかったのは2021年だった。復興計画の期間を終え、震災10年を迎える年、町長は事業面では10段目で階段の頂上まで上ったと評価したが、地域発展はここからさらに10、20段と続くと語った<sup>38</sup>。一方この年9月の「復興の階段」で住民は5段目と答えた。10年という時が経過しても悲しみが癒えない人がいると話した<sup>39</sup>。また2020年、住民は「段数なし」と回答した<sup>40</sup>。回答した栗野祥子さんは「女川町はゴールがない新しい階段を登っている」と考え、そこに段数はないと答えた。

復興の感じ方は一人一人違って当然であるが、町長のほうが高い段数を回答

<sup>38</sup> 石巻日日新聞 2021年3月6日1面「震災から10年へ 復興の階段 女川町須田善明町長 10段目からさらに上に「面白い」と思えるまちに 今後の活力維持宿題」

<sup>39</sup> 石巻日日新聞 2021年9月21日1面「東日本大震災から10年 復興の階段 今、私にできることは何か 元・女川町立病院総看護師長 高橋洋子さん（63） 悲しみ癒えぬ人もおり5段目」

<sup>40</sup> 石巻日日新聞 2020年3月16日1面「復興の階段⑤ まちづくり新たな道へ 女川は「第二の古里」 栗野祥子さん ゴールなき階段に段数なし」

する傾向にある。概ね計画通りに復興が進んでいることや町のリーダーとして前向きにそのような回答をしたのだろう。住民も人によって環境は千差万別で、どれほど復興しているか評価は異なる。

#### 4.女川町に関する東日本大震災報道の紙面比較

前章では、毎日新聞・河北新報・石巻日日新聞の2011年3月11日から2022年8月31日の1面を読み、東日本大震災の女川に関する記事を内容種類別に集計した。その結果1面で多く取り上げている記事の種類に違いや傾向があること、3紙全てで報じている女川の報道があることが分かった。

今回の3紙紙面調査と私が定点観測的に女川の復興を実際に見て感じた変化から女川町に関する東日本大震災報道においてカギとなる出来事は次にあげる5つだと考える。

まず、調査によって分かった3紙全てで1面記事になっていた東日本大震災の女川に関する出来事は次の3つである。

- ・七十七銀行女川支店訴訟 敗訴 (2014年2月25日)
- ・女川原発2号機 再稼働地元同意 (2020年11月11日)
- ・いのちの石碑 21基目完成 (2021年11月21日)

また、3紙共通して1面記事ではなかったが、次の2つの出来事は、東日本大震災後の女川において重要な出来事であると考えするため紙面比較する。先に挙げた3つの記事は全て1面だが、次の2つは1面以外の場合も含んでいる。

- ・東日本大震災発生直後 号外 (2011年3月11日～12日)
- ・女川まちびらき (2015年3月21日)

本章ではこの5記事の3紙紙面を用いて全国紙・地方紙・地域紙の報道について3紙共通報道と各紙独自内容に分けて紙面を考察する。

#### 4-1 七十七銀行女川支店訴訟 敗訴

##### [七十七銀行女川支店訴訟 概要]<sup>41</sup>

七十七銀行女川支店は女川湾から 100m ほどのところにあり、近くには指定避難場所の堀切山があった。堀切山の他に支店の屋上が支店の避難場所に 2009 年 10 月に新たに加えられた。

震災発生時、外回りに出ていた支店長が午後 2 時 55 分頃支店に戻り、屋上への避難を指示した。午後 3 時 20 分過ぎ、支店に津波が襲来し従業員全員が津波に流された。1 名は救出されたが 12 名の従業員が犠牲になった。一方、もう一か所の支店指定避難場所となっていた堀切山にも津波は来たが、避難した 600 人以上が無事だった。

被災者家族会は犠牲が想定外で仕方なかったこととせず次の災害の教訓にすべきだとしている。裁判では企業の安全管理が問われた。

---

<sup>41</sup> 「東日本大震災から学ぶべきもの：大切な命を守る企業防災・組織防災を一緒に考えましょう：2016.3.5 フォーラム：報告書」 p.63

## [紙面比較]



### 1. 毎日新聞

2014年2月25日夕刊1面

[見出し]

- ・「原発活用を明記  
エネ計画政府原案決定」
- ・「津波 屋上避難に合理性  
行員遺族の賠償請求棄却  
仙台地裁」
- ・「米陸軍 戦後最少に  
国防予算 兵力45万人に削減」
- ・「「お疲れさま」ソチ選手帰国」

[見出し]

- ・「七十七銀女川支店損賠訴訟 津波  
屋上越え予見できず  
仙台地裁判決 家族の請求棄却」
- ・「震災アーカイブ構築へ  
復興記録 写真や文書データベース化  
サイト15年3月開設」
- ・「子ども自殺 全件調査  
文科省会議指針見直し 教職員、即日  
聴取」
- ・「ソチ五輪 メダル誇らしく 日本選  
手団が帰国」
- ・「震災3年黙とうを  
首相が呼び掛け」
- ・「原発の再稼働推進 「ベースロード  
電源」明記 政府エネ計画案」
- ・河北春秋

### 2. 河北新報

2014年2月26日朝刊1面



### 3. 石巻日日新聞

2014 年 2 月 25 日 1 面



[見出し]

・「石巻地方 大雪低気圧が浜直撃 外湾の養殖ワカメ 8割脱落 漁業者 最盛期目前に痛手」

・「安全配慮義務違反認めず 七十七銀行女川支店訴訟 遺族の訴え棄却」

・「石巻地方の水産被害約 1 億円 県まとめ 今後も増える見通しに」

・「新生活を思い描き見学 小野地区災害公営住宅 間取りなど入念に」

・「東松島市も医療費免除 4 月から再開 3 月中に対象者へ通知」

・暖流寒流

### 3 紙共通報道

裁判長の言葉と日和幼稚園訴訟について記事で触れている点が共通していた。裁判長の言葉を引用している点は共通しているが、内容は共通している点・していない点があった。

共通しているのは、巨大津波の予測は困難であったため屋上への避難には合理性があり、避難マニュアルが安全配慮義務違反ではないことについての裁判長の言葉だ。また、今回の判決を言い渡した裁判長は、日和幼稚園訴訟でも判決も言い渡しており、各紙日和幼稚園訴訟についても触れている。日和幼稚園訴訟も、今回の七十七銀行女川支店訴訟と同様に震災犠牲者の遺族が施設の管理者責任を問う訴訟だった。この訴訟では遺族側が勝訴した。

河北新報には企業と行政機関の違いがあること、避難マニュアル改定の際に屋上を加えた点について評価した裁判長の言葉が書かれている。石巻日日新聞には裁判の争点の一つだった情報収集について裁判長の判断を載せている。裁

判の争点の一つだったがこの点について記事で書いたのは石巻日日新聞だけだった。

### 各紙独自報道

1面中の記事の位置について、河北新報は1面トップ、毎日新聞・石巻日日新聞は2番目の記事だった。

毎日新聞・石巻日日新聞は原告を「遺族」と表現した。それに対し河北新報は「家族」と表現し、行員遺族というような言葉は記事中になかった。他にも毎日新聞は犠牲行員の名前を実名で報じたが、遺族の名前は書かなかった。河北新報は犠牲行員の名前・遺族の名前（実名）共に無く、「家族側は」という書き方だった。石巻日日新聞は犠牲行員の名前は出さず、「男性行員」などの書き方だったが、遺族の名前は実名で報じた。具体的な名前を記事中に出すか出さないかは各紙それぞれだった。

毎日新聞では、記事解説でこれから起きると考えられる首都直下地震や南海トラフ巨大地震に触れ、次の災害に向けた対策を急ぐべきだと書いている。首都直下地震は東京で起きるとされ、南海トラフ巨大地震も日本の広い範囲で地震や津波が想定されているため、全国紙では自分の身に起きるかもしれず、同じ悲劇を繰り返してはならないことを強調した。

現場の地図、判決骨子の図表を載せたのは河北新報だけだった。

石巻日日新聞は他の2紙と違い、唯一、判決を受けた後の遺族側の様子の写真を載せている。他にも、遺族側二人のコメントを載せ、判決を受けて七十七銀行が発表したコメントも載せている。銀行のコメントを載せたのは石巻日日新聞だけだった。このように遺族側・裁判所・銀行の3者のコメントを載せ、3者それぞれの視点で記事を書いている。

## 4-2 女川原発 2 号機 再稼働地元同意

### [女川原発 概要]

東北電力女川原発は、女川町中心部にある女川駅から直線距離で 7 km 離れている。女川原発の位置を図 3 に示した<sup>42</sup>。

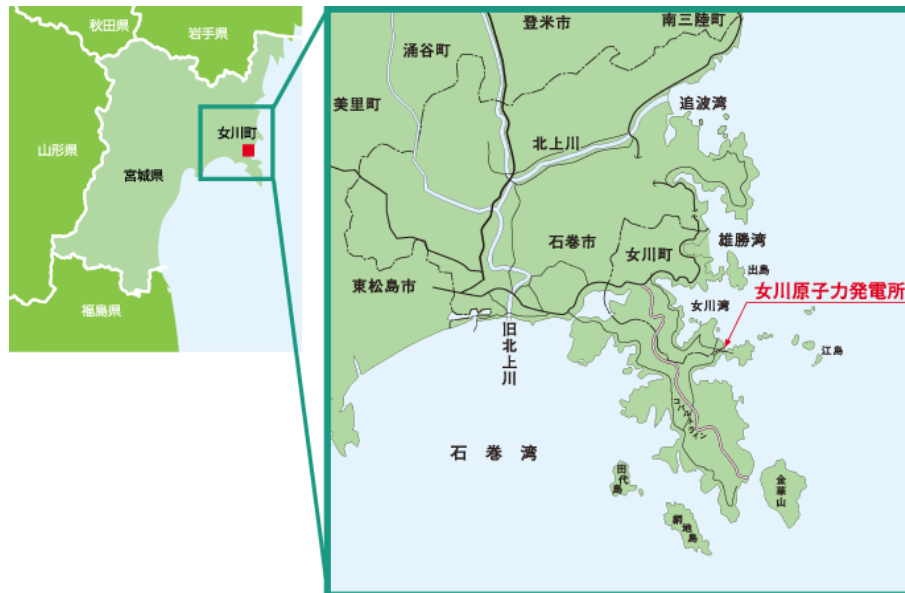


図 3 女川原子力発電所の位置

1 号機は 1984 年 6 月、2 号機は 1995 年 7 月、3 号機は 2002 年 1 月に営業運転が開始された<sup>43</sup>。

震災後の女川原発について年表 2 にまとめた。今回の紙面調査では 2022 年 8 月までとしたが、2023 年 9 月 28 日に再稼働延期が決定されたため、最新の動向としてこの年表にも加えた。

東日本大震災で女川原子力発電所では震度 6 弱の揺れ、最大約 13m の高さの津波が押し寄せたが、原子炉は安全に停止した。東京電力福島第一原子力発電所

<sup>42</sup> 東北電力ホームページ 女川原子力発電所の紹介 [女川原子力発電所の紹介 | 東北電力 ホームページ \(tohoku-epco.co.jp\)](https://www.tohoku-epco.co.jp/onagawa/) (2023 年 11 月 13 日閲覧)

<sup>43</sup> 『女川原子力発電所見学 BOOK 女川原子力発電所ってどんなところ?』p.1 発電設備の概要

| 年     | 月   | 主な出来事                        |
|-------|-----|------------------------------|
| 2011年 | 3月  | 東日本大震災発生 安全に停止、発電再開の見通し立たず   |
| 2012年 | 7月  | IAEAが女川原発視察（2013年4月調査結果報告）   |
| 2013年 | 6月  | 原発新基準決定                      |
|       | 12月 | 東北電力が原子力規制委員会に新規制基準適合性審査を申請  |
| 2014年 | 11月 | 宮城県が有識者検討会の初会合を開催            |
| 2017年 | 3月  | 女川町 広域避難訓練計画策定               |
| 2018年 | 9月  | 1号機廃炉検討                      |
|       | 11月 | 2号機再稼働問う県民投票 必要署名達成          |
|       | 12月 | 1号機運転終了 廃炉令和35年度完了予定         |
| 2019年 | 3月  | 再稼働 県民投票条例案否決                |
|       | 11月 | 市民有志 再稼働同意差し止め申請             |
|       |     | 2号機 新基準適合 再稼働前提審査に合格         |
| 2020年 | 2月  | 2号機 新基準適合決定 正式合格             |
|       | 3月  | 政府から2号機再稼働の同意要請を受ける          |
|       | 4月  | 安全対策工事の完了時期を22年度に延期 4回目の延期   |
|       | 6月  | 政府の原子力防災会議が広域避難計画を了承         |
|       | 7月  | 有識者検討会が県に意見を報告               |
|       | 8月  | 県が原発30キロ圏内7カ所で住民説明会を開催       |
|       |     | 女川町原対特別委 再稼働賛成陳情採決           |
|       | 9月  | 女川町議会、石巻市議会が賛成陳情を採択          |
|       |     | 再稼働正式同意                      |
|       | 10月 | 県議会 女川2号機再稼働容認               |
| 2021年 | 11月 | 市町村長会議で意見聴取                  |
|       |     | 3者協議 女川再稼働 地元合意 知事も再稼働容認     |
|       |     | （女川町、石巻市、県の3者の判断が県内35市町村の総意） |
| 2023年 | 9月  | 2号機再稼働来年5月に延期 6回目の延期         |

年表2 東日本大震災後の女川原発

は震源から約 180 kmだが、女川原発は震源地から約 130 kmの場所にあり、最も近い原子力発電所だったが、3 機すべて 設計通りに自動停止した。外部電源は 5 回線のうち 1 回線が確保され、原子炉を冷却するための海水ポンプを動かす電力を賄うことができた。発電所の敷地内に設置している放射線モニターの値に異常は見られず、外部への影響はなかった。このように、女川原発は震災時、「止

める」「冷やす」「閉じ込める」が機能し、安全に停止できた<sup>44</sup>。1号機は老朽化に伴い維持が困難であるため、2018年12月21日に運転終了した。35年かけて廃炉作業を行っている。

「私たち所員がめざす女川2号機の運転再開は、単なる再稼働ではなく、発電所をゼロから立ち上げた先人たちの姿に学び、地域との絆を強め、東京電力福島第一原子力発電所事故を教訓に、新たに生まれ変わるとの決意を込めて「再出発」と位置付けております。私たちは地域の皆さまから信頼され、地域に貢献する発電所となるよう、「安全対策に終わりはない」という確固たる信念のもと、発電所の安全性向上に向けて不断の努力を重ねてまいります。」<sup>45</sup>

2号機再稼働について女川原発としてこのように考えている。福島第一原子力発電所事故から学び、同じ事故を起こさないために、安全性を高め、信頼されることを再稼働において重要視している。

再稼働を巡っては宮城県、女川町・石巻市、地域住民で賛否が分かれ、再稼働に向けた審査に合格し、地元再稼働合意が決定しても、再稼働反対の地元グループが裁判を起こしている。3-4 総合計画期の結果からも読み取れたように、2019年11月に再稼働前提の審査に合格し原発記事が増加した。女川2号機再稼働を巡って反対運動、請願運動が起こった。

東北電力の意向と県、立地自治体の女川町・石巻市、市民の再稼働についての考えはどのように新聞報道されているか。

---

<sup>44</sup> 『あの日を、未来へつなぐ。－女川原子力発電所の備えと教訓－ 2011.3.11』 p.1

<sup>45</sup> 『あの日を、未来へつなぐ。－女川原子力発電所の備えと教訓－ 2011.3.11』 裏表紙

【紙面比較】



1. 毎日新聞

2020年11月12日朝刊1面

【見出し】

- ・「助言委「感染急拡大恐れ」 新型コロナ 日医会長「第3波」」
- ・「通常国会1月中下旬召集 早期解散見送り強まる」
- ・「女川再稼働 地元同意 宮城知事「雇用創出を期待」」
- ・「冬は加湿で飛沫拡散防止 気温、紫外線、湿度 感染力に影響」
- ・余録



2. 河北新報

2020年11月12日朝刊1面

【見出し】

- ・「宮城知事 女川再稼働同意 福島第1と同型で初 立地2市町と協議 妥協の産物 あまりに早計」
- ・「むつ・中間貯蔵 審査合格 規制委 原発敷地外で唯一」
- ・「国内感染1547人 過去最多迫る 日医会長「第3波」」
- ・河北春秋



### 3.石巻日日新聞

2020年11月12日1面

[見出し]

・「女川2号機・被災原発で初 村井知事 再稼働に同意」

3者協議を経て正式表明」

・「知事「判断時期は適切」

議会採決や首長会議重視

立地自治体 安全対策念押し

安全向上へスタート 須田女川町長  
実効性のある計画を 亀山石巻市長」

・「緊急事態宣言も視野 感染者  
900人超」

### 3 紙共通報道

3紙とも会見時の村井宮城県知事の写真を載せた。

被災原発で初となる再稼働地元同意容認となった点、3者協議後の記者会見で知事が述べた点、女川2号機の2020年の流れについては各紙共通して取り上げていた。

### 各紙独自報道

女川原発2号機再稼働に関して報道傾向に大きな違いが見られた。

毎日新聞は1面3番目、河北新報・石巻日日新聞は1面トップで報じた。河北新報は、記事自体も大きく、黒い背景に白抜き文字の見出しで1面トップを大きく飾った。石巻日日新聞は1面の3つの記事のうち2つが2号機再稼働についての記事だった。3紙の中で唯一、3者協議の写真を載せた。毎日新聞の2市町のコメントは「村井知事と2市町長は」という知事と連名で発表したもの

だけだった。再稼働容認の背景に触れている。

河北新報は2市町のコメントと東北電力の談話も載せた。また記事の【解説】では次のような文章が書かれていた。

「「地元同意」は、消極的な容認の積み重ねにすぎない」

「過酷事故を起こした東京電力福島第1原発の隣県として、人命と財産を守るべき県政トップとして、あまりにも早計だ」

「なぜ生煮えのままゴーサインを出すのか」

さらに、市町村長会議での意見をまとめる際の知事の強引な手法について「単なるセレモニーにおとしめた」「本音ではない、妥協の産物による拙速な決断は将来に禍根を残しかねない」と批判的だ。

この日は社説でも知事が再稼働同意表明について取り上げた。地元同意の「地元」は明確に定まっていない。河北新報社が行った世論調査では「3者（県と2市町）が適切」と答えたのは7.6%だったが、「県と県内すべての自治体」と回答したのは最も多く6割だった。原発30キロ圏内の5市町は事故が起これば被害を受けることが予想されるが再稼働判断の権利はなかった。それにも関わらず5市町の首長で9日に開かれた市町村長会議で再稼働反対を明言したのは一人だけだった。これについて、2市町への遠慮があっただろうとしつつも、「しかし、住民の負託を受けた首長のあるべき態度とは言えまい」と批判した。また、国が震災の教訓として避難計画策定を義務付ける範囲を立地自治体に加え半径30キロ圏の自治体に広げた点にも触れた。避難計画策定義務のある範囲と整合性を取るためにも地元同意の範囲を広げる決定を国がすべきだと主張した。

この記事の他に2020年11月21日、22日、23日朝刊1面に原子力取材班による「女川再稼働を問う むなしき同意」の連載特集があった。

21日「上 裁量 /知事 中立装い主導権 /枠組み曖昧 /拍手で採決」は、決の取り方・反対する人たちの話を交えながら知事のやり方に批判的な内容。

22日「中 レール /避難路整備 決め手に /予算に言及 /BWRは初」は、県内の市町村の意見など関係なく元々決められていた再稼働だったという内容。

23日「下 未完 /事故対策 消えぬ不安 /被ばく懸念 /古里を喪失」は、地元住民に話を聞き、不安が残るが、再稼働以外の道はなく困惑する住民の様子。

これらの記事から分かるように、河北新報では女川原発再稼働について知事に対する強い批判が書かれている。東北 6 県のブロック紙として、福島第一原発が立地する福島県もエリアに含んでいる地元メディアとして主張した。

石巻日日新聞は、再稼働地元同意発表を受けて「村井知事・一問一答」として 5 つの質問を村井知事に実施しその答えを載せている。質問はいずれも地域住民の疑問や不安に応える内容だ。1 面 2 番目の記事で女川町長・石巻市長のコメントが他 2 紙より多く書かれている。両首長とも安全性つまり避難計画について触れ、住民の安全を守ることについて強調した。原発立地自治体首長の考えや決意を地元紙として地域住民である新聞読者に伝えた。

福島第一原発の事故を受けて、原発再稼働に関するニュースは全国的に関心が高くなっただろう。原発の問題は福島第一原発、女川原発だけでなく、全国にある原発にも関係がある。そのため、全国紙でも女川に関して多く取り上げられた。3 章の結果をもとに原発に関する記事の件数に着目すると 3 紙の中では石巻日日新聞が 4 期間通じて一番多い。女川原発が女川町と石巻市にあり、発行エリアと原発立地地域が重なるため、避難訓練など地域住民に必要な情報を多く報じている。

#### 4-3 いのちの石碑 21 基目完成

##### [いのちの石碑 概要]

震災直後に中学校に入学した 64 名の女川の新入生たちは、授業の一環で巨大津波から命を守る対策案について議論した。その具体策の一つとして「いのちの石碑プロジェクト」を計画した。「いのちの石碑プロジェクト」は町内 21 の浜の津波到達地点に震災の教訓を記した石碑を建てる取り組みである。生徒たちは「千年後の命を守る」を合言葉に 2013 年 2 月から募金活動を開始した。同年 9 月、石碑 21 基分の建設費用である募金目標額の約 1000 万円を達成した。同年 11 月 23 日、1 基目の石碑が建立された女川中学校の敷地で除幕式が行われ

た<sup>46</sup>。1 基目設置から 8 年経った 2021 年 11 月 21 日、最後の 21 基目の石碑が新たに開校した女川小中一貫校に完成した。

いのちの石碑 21 基完成のニュースが 3 紙共通して 1 面で取り上げられたのは、「中学生」が「8 年間継続」してきた震災伝承活動という点に珍しさがあるからではないだろうか。

---

<sup>46</sup> 『女川町誌 第三編』 p.96 Column09 千年後の命を守る、いのちの石碑

【紙面比較】



1. 毎日新聞

2022年3月6日朝刊1面

[見出し]

・「迫る: 1000年後の命を守る 女川津波到達点の石碑

中学生が建立を計画」

・「露国内の報道規制強化

BBC、CNN 活動停止」

・余録



2.河北新報

2021年11月22日朝刊1面

[見出し]

・「1000年後の女川へ 夢壊させぬ教訓

「いのちの石碑」全21基完成」

・「3回目接種 基準明示を

知事会、国に緊急提言へ」

・「福島市長に木幡氏再選」

・「ユヅ復活祈願ファン次々 羽生選手ゆかり 宮城の神社

のぼり、絵馬 奉納多数」

・河北春秋

### 3.石巻日日新聞

2021 年 11 月 22 日 1 面



[見出し]

・「いのちの石碑 計画達成

女川・最後の 21 基目建立

ゴールではなく“スタート”

1 千年後へメッセージ」

・「女川「崎山トンネル」開通

雄勝町と結ぶ 398 号 つづら折り、

狭あい解消」

・「本紙で毎月連載 ポプラ社千葉社長」

・「メディア芸術祭 27 日参加募集 ゲームで地方創生」

・「名取で 1 人感染 県内 1 週間ぶり」

・暖流寒流

### 3 紙共通報道

いのちの石碑計画が始まった経緯を各紙共通して取り上げ、21 基目の石碑の前で記念撮影する女川中学校卒業生の写真とともに伝えた。

### 各紙独自報道

いのちの石碑 21 基が完成したのは 2021 年 11 月 21 日だった。河北新報と石巻日日新聞は 21 基目の石碑が完成した翌日に 1 面トップで伝え、21 基目の石碑の前で記念撮影する女川中学校卒業生の石碑プロジェクトメンバーらの写真を載せている。毎日新聞は他の 2 紙より遅く、21 基目完成から 3 か月半後の 2022 年 3 月 6 日に 1 面トップの特集記事で伝えられた。他の 2 紙にはない、2013 年に撮影された 1 基目のいのちの石碑の除幕式の様子の写真も載せられた。毎日新聞と河北新報・石巻日日新聞では記事の中心となる部分が異なる。

毎日新聞は 1 面ほとんどでいのちの石碑計画が始まるまでの経緯を伝えた。毎日新聞は 21 基目の石碑が完成し、その計画には中学生の継続的な行動があっ

たことを伝え、「中学生の活動」を強調している。この計画が始まるまでの経緯を、計画メンバーの一人鈴木智博さんの震災体験談と、「いのちの石碑」活動が始まった女川第一中学校教員の阿部一彦さんの話を踏まえ説明している。この記事は 3 面に続いており、石碑を実際に建てるまでの道のりについて、鈴木さんの視点で書かれている。

一方で、河北新報・石巻日日新聞は 21 基目の「いのちの石碑」の除幕式を中心に伝えた。毎日新聞の記事の中心になっていたいのちの石碑活動の経緯については最低限の情報として触れる程度だった。

河北新報は「女川 1000 年後のいのちを守る会」（計画が始まった当初中学生だった女川中学校同級生で作る会）会長のコメントを載せた。また、毎日新聞の記事にも出ていた鈴木智博さんの「残りの 990 年、人々が自分の命を守れるように防災の輪を広げていきたい」というコメントで記事は締められた。

石巻日日新聞は「ゴールではなく“スタート”」という見出しにもあるように 21 基目の石碑が完成して計画は完結ではなく、伝承活動が大切という点を強調している。支援に感謝する「1000 年後のいのちを守る会」会長、守る会のメンバー 2 人のコメント・町長の激励コメントは毎日新聞・河北新報にはなく、地域住民の活動として報じ続けてきた新聞社としての報道だと言える。また、この石碑の役割など、石碑自体の説明する内容もあり、石碑・除幕式いずれについても毎日新聞、河北新報より詳細に書かれていた。

#### 4-4 東日本大震災発生直後

##### 【震災直後の地元新聞社】

1 章でも述べたように、震災発生直後の女川は孤立状態になり、被害などの情報が町の外に全く伝わっていなかった。

沿岸被災地へ取材に向かった記者たちは壊滅状態であることを頭で理解できても想像ができなかった。

河北新報社は被災直後に地域の被害を伝えようと奔走した社員について『河北新報のいちばん長い日 震災下の地元紙』に記録している。河北新報も被災メディアとして取材を始めたが、震災直後は仙台空港が被災し沿岸部を空撮する

ことができなかつたため仙台市内の情報を中心に報道した<sup>47</sup>。震災発生直後の号外は友好社の新潟日報社の協力を得て発行することができた<sup>48</sup>。

河北新報社では各販売所の安否確認に難航していた。その中、3月14日夜、女川販売所の阿部所長から生存を知らせる電話が本社にかかってきた。阿部は「店はやられたが、配達是可以。今、新聞を取りにそっちに向かっているから、とりあえず500部、用意してくれ」と言った。女川販売所へは輸送トラックも近づけず、12日、13日は女川に新聞は配送されなかった。14日、阿部が石巻市の隣接店に車で出向いたところ、新聞が届いていた。仙台から石巻までは道路が通っていた。12、13日付の新聞を分けてもらい、女川に戻った。停電で町内の状況すら把握できずにいた町災害対策本部は「ありがたい」と喜んで読み始めた。町内の避難所にも配って回った。被災地では地元情報が何よりも必要とされていた。情報源の一つだったラジオは福島第一原発の事故が起きて以降、原発中心の報道に移り、地元情報がわき役に追いやられていた。「河北こそが地元の被災者の需要に応えられる」阿部はそう確信した。15日未明、阿部の車は印刷センターに着いた。女川に戻り、災害対策本部と各避難所に50部ずつ無料で配った。<sup>49</sup>

1-1[父の体験]で父が15日の河北新報を読んだ記憶があると述べた。その背景には、地域だけでなく情報収集という点でも孤立状態に陥った地域のために尽力した河北新報女川販売所の熱意があった。

被災した石巻市にある石巻日日新聞社では、取材先で被災し数日安否不明の記者もいた。震災翌日から地域の新聞社として伝える使命を果たすため、壁新聞で地域の被害や災害の情報を伝えた。12日の壁新聞を含む17日までの6枚の壁新聞はワシントンのニュージウムに保存されたり、ドラマ化されたり多くの反響を呼んだ。壁新聞発行となったことについて近江社長（当時）は社として、「壁新聞は災害に対して準備をしてこなかった末の結果でもあり、経営者とし

---

<sup>47</sup> 『河北新報のいちばん長い日 震災下の地元紙』p.38

<sup>48</sup> 『河北新報のいちばん長い日 震災下の地元紙』p19-22

<sup>49</sup> 『河北新報のいちばん長い日 震災下の地元紙』p133-139

ては複雑な心境であり、未熟さを痛感しています。」<sup>50</sup>と述べている。壁新聞で新聞報道を続けたことは美談として、災害時のメディアの在り方の良い評価がされることが多い。その一方で近江社長は、防災・減災の意識が不十分だったため壁新聞という方法でしか新聞社として伝えることができず、災害に対する意識の低さの結果だと考えている。

震災後最初の報道で各新聞社は何をどう伝えただろうか。

[紙面比較]



1. 毎日新聞
- 2011年3月11日号外1面  
[見出し]  
「東北で巨大地震  
大津波 死者多数  
M8.4 宮城 震度7」

<sup>50</sup> 『6枚の壁新聞 石巻日日新聞・東日本大震災後7日間の記録』p.252

河北新報

[illegible]

## M8.8 大津波被害」

M8.8 大津波被害

# 号外

佐賀県

佐賀県立総合体育館

小笠原

[illegible]

石卷日日新聞

号外

東北太平洋沖地震  
 11日午後1時45分ごろ、三陸沖で地震。震源は、地震発生、地震規模はマグニチュード8  
 最大震度「7」。明治時代に地震観測の  
 目撃した地震、石巻地方で「6」で記録  
 まるは津波が押し寄せ、石巻郡とはじめ  
 なでうらなうた。その後、犠牲者は  
 甚だしく見えた。  
 道路は土まき、土車が無残な姿で  
 散らしている光景がみられる。

(12) 現在の被害状況

石巻市 災害本部によります

11日午後4:00 石巻市役所1階以下崩落。  
鮎川浜全壊が壊滅状態。  
同 門小が全焼。  
同 北村小が倒壊の恐れあり  
同 720航空自衛隊松島基地は  
滑走路が浸水し、海側を  
同 810 天王橋が  
12日午前10:35内海橋陥落  
(火災情報)

11/5 12日にかけて日和佐・丘岡辺や  
中央・蛇田地区などで火災相次ぎ。  
※石巻市役所と市消防本部との  
協力を要する火災が市内の  
皆様に知らせられています。

・「(火災情報)」

### 3 紙共通報道

見出しはどの新聞社も大きく（毎日新聞は黒い背景に白抜きの文字で「東北で巨大地震」、河北新報は毎日と同じで黒い背景に白抜きの文字で「宮城 震度 7」、石巻日日新聞<sup>51</sup>は手書き文字で「日本最大級の地震・大津波」）、甚大な被害、災害が起きたことを強調した。

震災直後は情報の少なさゆえに、具体性を欠く曖昧な表現で被害情報を伝える文が目立つ。

毎日新聞：「死者が多数出ているとみられる」「甚大な被害が出ている」

河北新報：津波の情報は釜石の津波被害だけ。「大きな被害が出ている」「死傷者の情報は把握されていない」

石巻日日新聞：「まもなく津波が押し寄せ沿岸部をはじめ、各地は水没。津波に巻き込まれ、行方不明となっている人たちも多く、今後犠牲者は増える見込み」

### 各紙独自報道

3紙とも号外で伝え、毎日新聞・河北新報は3月11日、石巻日日新聞は12日に手書きの壁新聞が震災後最初の報道になった。全国紙は「東北で巨大地震」、地方紙は「宮城 震度 7」、地域紙は「石巻地方 6 強」の見出しだった。「地名＋地震の大きさ」という同じ形式だが、地名が各紙違い新聞ごとに強調して伝えたい地域が異なる。

毎日新聞・河北新報は津波で流される車を映したテレビ画面の写真で伝えた（毎日新聞は MBS テレビ、河北新報は NHK のニュースの映像から）。毎日新聞は各地の震度が載った地図を唯一 1 面に載せた。

毎日新聞は M8.4、河北新報は M8.8、石巻日日新聞は M8.8 を M9.0 に情報を更新し大きく伝えた。本震について気象庁が発表したマグニチュードは 2011 年 3 月 11 日 14 時 49 分発表 M7.9（気象庁マグニチュード：速報値）、同日 16 時 00 分発表 M8.4（気象庁マグニチュード：暫定値）、同日 17 時 30 分発表 M8.8（モーメントマグニチュード）、3 月 13 日 12 時 55 分発表 M9.0（モーメントマ

---

<sup>51</sup> 『石巻日日新聞（号外）』平成 23 年 3 月 12 日、石巻日日新聞社、2011-03-12. 国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/2623226>（参照 2023-11-22）

グニチュード) だった<sup>52</sup>。モーメントマグニチュードは岩盤のずれの規模をもとにし、大きな地震に対しても正確に計算できるマグニチュードである<sup>53</sup>。地震情報は気象庁からの情報も更新されたため、記事にしたタイミングで各紙情報が異なる。石巻日日新聞の壁新聞に書かれたマグニチュードは 8.8 から 9.0 に更新されているが、これは気象庁が発表した (13 日 12 時 55 分) 以降に書き足されたものと推測できる。

毎日新聞は全国各地の被害、主な被災地の被害一部のみで、全国に伝える上で重要とされる情報が多い。他に被害情報、気象庁が今回の地震を命名した、緊急対策本部を設置といった、政府などの動きも報じた。東北の震度情報の他に、関東や東京都心での地震の揺れについても報じている。

河北新報は仙台市内の被害情報を中心に伝え、3 紙の中で唯一、女川原発の情報にも触れた。津波情報や各地の震度 (6 強・6 弱) の場所を文字で伝えた。

[震災直後の新聞社]でも述べたが、震災当日の号外は新潟日報の協力でなんとか発行できたが、それは河北新報ではなく「新潟日報の新聞」だった。河北新報社の自社へりも被災し、震災初日はへりを飛ばして被災地の様子を写真に収めることができなかった。翌日、ようやく自社の記者による写真付きの被災地を伝える記事が完成し、「純河北製」の復活となった<sup>54</sup>。自社で伝えることに価値があるという考えで取材し新聞を発行しており、被災直後からも被害を伝える記事が多いのが河北新報の特徴だと考えられる。

石巻日日新聞は石巻地方の地域紙だが、震災後最初の新聞である 12 日号外には東松島・女川の個別の情報はなかった。河北新報、毎日新聞は仙台や岩手の被害状況最初に伝えたが、石巻日日新聞は石巻の情報だけを伝えた。社員らが書き上げた壁新聞は石巻日日新聞社から社員が向かえる範囲の避難所・場所に貼られたため石巻中心になった。壁新聞を見る人たちにとって必要な石巻の情報を

---

<sup>52</sup> 「災害時地震・津波速報 平成 23 年 (2011 年) 東北地方太平洋沖地震」気象庁 2011 年 8 月 17 日 p.2 1 地震の概要 (jma.go.jp) (2023 年 11 月 11 日閲覧)

<sup>53</sup> 気象庁ホームページ よくある質問集 震度・マグニチュード・地震情報について モーメントマグニチュードとは何ですか? 気象庁 | 震度・マグニチュード・地震情報について (jma.go.jp) (2023 年 11 月 11 日閲覧)

<sup>54</sup> 『河北新報のいちばん長い日 震災下の地元紙』p.74

中心としたほうが読者の情報を知りたい需要に答えられるのだろう。

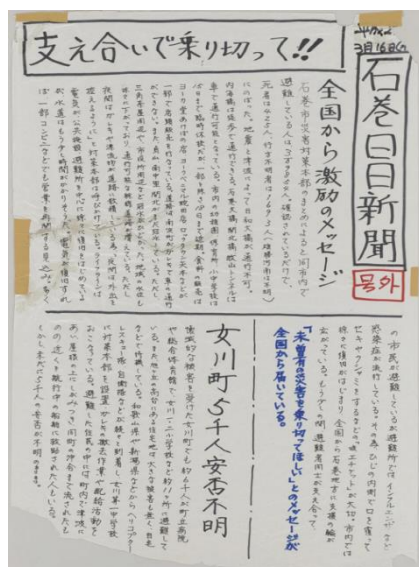
初めて女川の被害情報が石巻日日新聞で伝えられたのは、壁新聞 3 日目の 3 月 14 日だった。記事では、「10m を超す巨大津波を受けて高台にある町立病院、女川二小、女川一中、総合体育館を残し壊滅状態。現在（14 日）、自衛隊を中心に救助活動が開始されている。」と漸く女川の情報が伝えられた。この日の壁新聞の現物は、女川駅併設の女川温泉ゆぼっぽに女川の被害が初めて記された貴重な新聞として展示されている（写真 8）。



#### 【写真 8】

女川駅併設の温泉施設ゆぼっぽで  
展示されている 2011 年 3 月 14 日の石巻  
日日新聞  
(2023 年 7 月 28 日撮影)

初めて女川の情報を詳細に伝えたのが壁新聞 5 日目の 3 月 16 日だった<sup>55</sup>。この日の記事は女川出身の新人・横井記者が実際に自分の目で女川の被害を見て記事を書いた<sup>56</sup>。約 6 千人が避難していること、高台の地域では大きな被害がないこと、自衛隊などによる活動が行われていること、救助された人の情報、そして、未だ 5 千人の安否が不明であることを伝えた。沖合まで津波で流されたが、屋根の上にしがみつきなんとか救助された住民の情報を伝えたのは、石巻日日新聞が重視していた希望の持てる情報を伝えることだと言える。当時、女川の情報は少なく、「壊滅的」という言葉で伝えられることが多い中で、被災した読者が少しでも前向きになれる情報だっただろう。12 日、13 日の紙面には「正確な情報で行動を！」、16 日の紙面には「支え合いで乗り切って!!」というメッセージが添えられ、同じ被災者として読者に贈る言葉からも石巻日日新聞の前向きな報道姿勢が分かる。



## 石巻日日新聞

2011 年 3 月 16 日号外

[見出し]

- ・「全国から激励のメッセージ」
- ・「女川町 5 千人 安否不明」

また、横井記者は女川出身であるため、女川の記事の担当になることが多い。連載「復興の階段」では 2016 年・2017 年・2018 年・2020 年の須田女川町長、2015 年の女川町仮設団地自治会長、2019 年の町内の焼肉店経営者の回では横井記者が聞き手となっていた。

<sup>55</sup> 『石巻日日新聞（号外）』平成 23 年 3 月 16 日、石巻日日新聞社、2011-03-16. 国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/2623224> (参照 2023-11-22)

<sup>56</sup> 『6 枚の壁新聞 石巻日日新聞・東日本大震災後 7 日間の記録』p.117-124

#### 4-5 女川 まちびらき

##### [まちびらき 概要]

町内を走る IR 石巻線も震災で不通状態となり、女川駅は流失した。

3-2 基盤整備期の結果でも述べたように、女川まちびらきは女川の復興過程で欠かせない大きな出来事である。復興の象徴であり、これをきっかけに女川の復興への機運がさらに高まったと言えるだろう。

女川のまちづくり復興事業は様々な評価を受けている<sup>57</sup>。中でもここで紙面比較する女川のまちびらきに関連する場所である女川駅前とその周辺地区は 2018 年都市景観大賞都市空間部門大賞（国土交通大臣賞）、グッドデザイン賞、2019 年度土木学会デザイン賞最優秀賞を受賞している。

震災から 1 年経過した 2012 年時点で、町は図 4<sup>58</sup>にあるような状況だった。2015 年に駅が新しく完成し商店街が整備された辺りは茶色に斜線で示されている

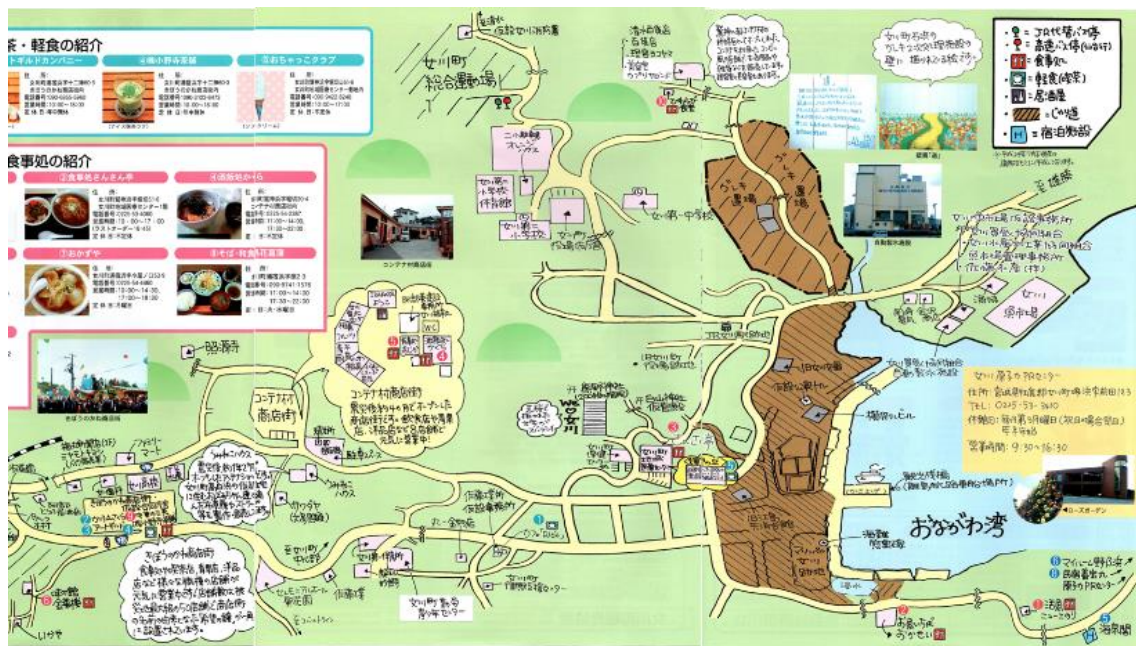


図 4 2012 年の女川町中心部 復興地図

<sup>57</sup> 『女川町 復興記録誌 2011-2021』 p.264「女川町復興事業の外部評価（各種受賞歴）まとめ」（2023 年 11 月 24 日最終閲覧）

女川町復興記録誌 2011-2021 ([town.onagawa.miyagi.jp](http://town.onagawa.miyagi.jp))

<sup>58</sup> 「おながわ再開情報」見開きページ

るように「じゃり道」だった。

2012 年のこの状況から 3 年経った 2015 年、震災以降不通となっていた女川町内の浦宿駅－女川駅間が再開し、石巻線は全線開通・復活となった。女川駅の復活と新駅舎完成に合わせて、女川のまちびらきが行われた。そのまちびらきは新聞ではどう報じられただろうか。

## [紙面比較]

### 1. 毎日新聞

2015年3月22日朝刊 31面



### [見出し]

・「自治はどこへ 2015年統一選：政策  
条例 熱意に差

「4年で4件」福島の村/「26年で2  
件」の都 制定阻む首長の権限」

・「職員2割うつ」判断

福島 全町避難自治体の一つ

県立医大など調査

「いつ帰れる」「何で事故に」 答えき  
れない苦情 負担」

・「JR石巻線つながった 最後の2.3キ  
ロ開通」

・「プロがソフトの穴を「計算」 電王  
戦第2局 反則誘導し初の2勝目」

・「チュニジアテロ 遺族ら帰国 言葉  
なく ツアー参加者「紙一重だった」

・雑記帳

・4コマ漫画 『桜田です!』



## 2.河北新報

2015 年 3 月 22 日朝刊 1 面

[見出し]

・「女川発、復興行き

石巻線全線再開、まちびらき」

・「首脳会談早期開催へ努力

日中韓外相 3 年ぶり会談」

・「いのちと地域を守る:

宮城の産学官-在仙報道機関-地域住民団体

防災啓発へ来月連携組織

基盤作り発信力強化」

・河北春秋

[見出し]

・「新生女川 笑顔のまちびらき

4 年ぶりつながった鉄路

青空の下 再出発 中心部に活気戻る」

・「大川小「すべて保存」を

地元協議会 来月、石巻市に要望書提出」

・「東松島市 定期人事を内示退職者多く大規模」

・「通学 0 分 時間有効に活用

石巻専修大

25 周年記念の学生寮落成」

・「憧れのヒーローに大はしゃぎ マンガッタン感謝祭 22 日もショーや体験会」

## 3.石巻日日新聞

2015 年 3 月 21 日 1 面



## 各紙共通報道

石巻線の全線再開と女川のまちびらきが行われたことを 3 紙共通して写真とともに伝えた。

毎日新聞は、女川駅を出発した最初の列車が走る写真と女川町の石巻線再開・女川まちびらきを伝えた。河北新報が掲載した写真は女川駅を出発する臨時列車を空撮したものだった。駅舎と出発する列車とその周りの復興途中で工事が行われているまちの様子を写している。石巻日日新聞は駅舎と女川駅併設の女川温泉ゆぼっぼの開業を祝う様子と女川駅を出発する列車の写真を載せた。

## 各紙独自報道

毎日新聞は 1 面で女川のまちびらきを報じていなかった。しかし、他 2 紙と同じ 2015 年 3 月 22 日の朝刊社会面に石巻線が全線開通した記事があった。この日の朝刊 1 面にまちびらきの記事はなかったが、題号の下の NEWSLINE に「JR 石巻線が全線開通」とある。1 面記事ではなかったが、その日の新聞のトピックになっている記事であるため、毎日新聞でも石巻線再開に注目していることが推測できる。さらに、記事ではニュースサイトで写真特集と動画があることが表示されており、被災地の復興に注目していることが分かる。

河北新報と石巻日日新聞は「4 年ぶり」に石巻線がつながったことを伝える。毎日新聞には「4 年ぶり」という情報は書いていなかった。地元 2 紙が 4 年という時間を強調したことから被災地での 4 年という時間の重みを感じられる。

河北新報は 1 面トップで「女川発、復興行き」の見出しで石巻線全線再開と女川まちびらきを伝えた。前週 3 月 20 日朝刊 19 面から 21 面で翌日に控えた女川まちびらきの特集を組んだ。以下、各面の内容。

19 面：試運転する列車を写した写真、女川水産業の復興を伝える KIRIN の広告

20 面：女川駅併設の温泉施設ゆぼっぼの詳細と町長インタビュー、復興祭広告

21 面：震災前、震災直後、震災後の女川中心部の写真を載せ、地域の時間の経過とまちの姿の変化を伝えた。

石巻日日新聞はまちびらき当日（3月21日）の紙面で大きな見出しと1面トップで女川のまちびらきと石巻線の再開を伝えた。始発に乗車した人のインタビューもあった。見出しには「新生女川」とあり、石巻線の全線再開よりもまちびらきが記事の中心の出来事と言える。記事は「おながわ復興まちびらき2015春」が21日、女川町駅前広場で開かれた」という文から始まり、まちびらき式典を中心に伝えた。また、石巻日日新聞はまちびらき15日前の3月6日から毎日1面で「まちびらきまであと〇日」のカウントダウンを載せた。近づくまちびらき当日が読者をわくわくさせる。石巻日日新聞は3月17日から19日

の3日連続で「女川再生 3・21 まちびらき」を1面で特集した。女川町民3人にインタビューし、町の復興に期待する町民の声を伝えた。また、3月25日2面には「女川 復幸へ 発車オーライ」の見出しで石巻線の復活と女川まちびらきの喜びの様子を写真とともに伝えた。

河北新報・石巻日日新聞はまちびらき当日の1面以外でも特集を組み、女川のまちびらきを取り上げた。新聞社として、さらに地域住民の一人として喜んでいる印象を受ける。震災で壊滅状態になった駅周辺の復興の過程を取材し、報じているからこそ女川再生とまちびらきの喜びがあるのだろう。震災直後「壊滅的」としか情報が伝わっていなかった被災地の復興の希望的存在として、紙面からも復興を楽しみにしている様子が伝わる。また、石巻線の全線再開は宮城県内で被災した在来線で初めてのことであるため、大きく報じられたとも考えられる。



女川まちびらきのカ  
ウントダウン  
(石巻日日新聞  
2015年3月6日)

#### 4-6 紙面比較から見る各紙の傾向

4章では七十七銀行女川支店訴訟、女川原発2号機再稼働地元同意、いのちの石碑21基完成、震災直後の各紙新聞報道、女川まちびらきの5つについて毎日新聞、河北新報、石巻日日新聞を紙面比較した。各記事を新聞社ごとに比較して全国紙・地方紙・地域紙の傾向を分析する。

3紙共通報道もあるが、同じ出来事を取り上げていても各紙独自報道のほうが

多く、違いが明らかになった。

毎日新聞は被災地の一自治体での出来事として女川の出来事を伝える。七十七銀行女川支店訴訟や原発問題は全国的に関心が高いと思われる話題である。震災時の避難について七十七銀行女川支店の問題は裁判になり、全国的に大きく取り上げられた。原発再稼働は福島第一原発事故の発生によって全国的な関心事となったため、被災原発の再稼働は全国紙でも大きく取り上げられた。それに対して地震発生直後は、どこか一地域など絞らず被害が出ている場所の情報を、東北を中心に広い範囲の情報を伝え、政府の動きも伝える紙面構成だった。

河北新報は被災 3 県を含む東北 6 県をエリアとした新聞であるため、女川を単体で扱うのではなく、「被災 3 県の自治体」・「宮城 10 市町」・「沿岸被災地」の中の一自治体として女川の情報を伝える記事が多い。しかし、まちびらきの様な最大被災地の一つとして復興の大きな前進となると、女川は大きく取り上げられる。

石巻日日新聞は他紙にはない地元の地域課題や問題について 1 面で大きく報じた。一方全国ニュースとなる話題について 1 面で取り上げないことも多い。例えば、オリンピック開催の年は毎日新聞、河北新報ではオリンピック関連記事が 1 面記事の中心になったが、石巻日日新聞にはなく、通常時と変わらず地域の出来事について伝えた。4-1 七十七銀行女川支店訴訟の記事を見ると、毎日新聞・河北新報にはソチ五輪でメダルを獲得した選手らの記事がある。石巻日日新聞は石巻地方の水産業に関する記事が中心にあり、オリンピックの記事はない。

石巻日日新聞は「3 紙の中で唯一」載せた情報が多かった。七十七銀行女川支店訴訟では 3 者のコメント、女川 2 号機再稼働では 3 者協議の写真、など地元に関する記事であるため内容は 2 紙より詳しい。

また、取材に向かった記者たちも被災し、沿岸被災地に取材に向かうと現実と見たくないような惨状を目にした。南三陸防災庁舎に放置されていた死体を見た河北新報記者らは、カメラを向けることも集まっていた人に取材することもできなかった。記者はその後「社のアンケートになぜ書かなかったのかを自問し、このように記している。〈あまりにも「命」が軽くなった現場に、不覚にも

現実感を持てなかったというのが正直なところかもしれません<sup>59)</sup>」このように記事にできなかった現実がある。記者も一人の人間であり被災者でもある。記者が取材できたことが全て新聞記事となって伝えられたわけではなかった。誰にも伝えられることがなかった現実が震災直後の被災地にはあった。女川のように震災直後、孤立状態となった場所では伝えられるきっかけすらないまま過ぎ去った出来事もあっただろう。

## 5.まとめ

本研究では毎日新聞、河北新報、石巻日日新聞の紙面調査から女川町に関する東日本大震災報道の変遷、新聞報道の仕方の違いから災害報道の役割の違いについて考察している。本章では「私が見た女川と被災地」「3・11 報道のこれから」「全国紙・地方紙・地域紙 それぞれの立ち位置」「研究の今後の展望」について述べ、論文のまとめとする。

### 5-1 私が見た女川と被災地

今まで私は、震災後、姿を変えていく女川に心のどこかで複雑な思いがあった。私には 9 歳までの女川の記憶しかなく、私の人生の中で現在は既に震災後の女川のほうが長くなった。気を付けないとふとした瞬間に震災前の女川を忘れてしまいそうなのがそのような思いにさせる。震災前の女川は大好きな場所のはずだが、ぼんやりとした情景の記憶が多く、私自身は女川として記憶しているが、全く違う場所のことを女川として間違って記憶しているかもしれないという気さえする。

震災が起きると想像もしていなかった上に、これほどまでに何もかもが無くなるとは思ってもしなかった。Google の「未来へのキオク」や、YouTube に投稿された動画で震災前の女川を見ることができる。しかし、それらを見たことで自分の肌で感じ直接見た女川の情景を補完してしまっているかもしれない。画面を通してみただけなのに 9 歳までの記憶の一部に組み込まれ、自分の目でその情景を見た気になってしまっている気がする。

---

<sup>59)</sup> 『河北新報のいちばん長い日 震災下の地元紙』p.83

その一方で私が確かに 9 歳までの自分で見たと言い切れる情景もある。お正月の獅子舞が来るのを家族で女川の祖父母の家で待っている時間に、暇で仕方がなかった私は、外は寒かったが居間の窓を少し開けて外を眺めた。道路を挟んだ向かい側を若い女性 2 人組が歩いて行った。私は何気なくその 2 人に手を振ってみた。すると女性たちは笑顔で手を振り返してくれた。女川での日常の記憶の断片が今でも確かに私の中に残っていることが嬉しい。インターネット上のどこを探しても見つからない女川の情景だ。震災前の女川はもう手に入れられず、戻ってくることはないという現実があるがゆえに、そのような記憶をたくさん持っておきたかったという悔しさがある。

紙面研究を通して、復興はかつての女川町が戻ってくるのではなく、新しい女川町に生まれ変わるという表現のほうが適切ということに気付かされた。

女川をはじめとする被災地では、震災前の被災地と呼ばれる前から人口流出や高齢化が課題となっていた。その最中に起きた震災によって千年に一度の被害・復興となった。そこで、この震災前からの課題になっていたものに対応するために、コンパクトな復興まちづくりを掲げた。その復興を指揮してきた町長や女川に住む人の考えをより様々な視点で知り復興について考えるべきだろう。この視点が紙面研究以前の私には欠けていた。

女川町内では沿岸地域、平地の町中心部は壊滅的被害を受け、何もかもがなくなった。女川町は平地が少なく、高台地域にある家は現在も震災前とそれほど変わっていない。実際、女川町内の高台に住んでいる私の親戚は、今も震災前と変わらず同じ家に住んでいる。地震による被害はあったが、津波の被害は受けなかった。地震によって家が傾き、震災からしばらくの間は家に黄色い張り紙が貼ってあったことを覚えている。ドアの補修などが終わり通常通りの生活できる状況になったが、今でも家の廊下を歩くとこの家は傾いていると分かる。

私は 3 年次のゼミ合宿で福島県の被災地を視察した。その時初めて女川以外の東日本大震災の被災地を目にした。中でも夜ノ森駅前の光景は印象的だった。震災の被害が津波被害だけではないことは頭では理解していたが、女川の被害しか実際に見てこなかった私にとって夜ノ森の様子は不思議に思えた。駅近く

には家があり、住宅街はここが被災地だということを意識しなければ地域住民の日常があると思ってしまう。しかし、街に人気はなく家をよく見ると窓が外れ中はぐちゃぐちゃだった。そこは日常ではなく、2011年3月11日の震災のまま時間が止まっていた。2024年3月11日で震災から13年。それぞれの地で復興が進められている。女川のように町が新しく生まれ変わっていく場所もあれば、福島・夜ノ森のように2011年3月11日から時間が止まっている場所もあることを忘れてはならない。「被災地」、「被災3県」など一括りにされることもある。しかし、当たり前なことだが、それぞれの場所で被害の爪痕は異なる。

## 5-2 3・11報道のこれから

震災後の年月を過ごしていく中で、時間が経てば経つほどメディアでの報道は次第に減少し、その代わり、記念日報道が主となっていることを実感した。その報道に意味はあるのだろうか。毎年3月11日近くになるとテレビや新聞・ネット記事などで震災特集が増える。常に震災のことを考えた報道をすべきだと極端なことを言いたいのではなく、「3月11日だから」ということに違和感があった。しかし、どうなればいいのか、自分の中で答えを見つけて言葉にすることができなかった。

時間が経つにつれて記憶から薄れてしまうのは避けられないことだろう。最も避けなければならないのは人々の記憶から完全に忘れ去られ、震災の教訓を生かせず再び同じ悲劇を繰り返すことだ。常に報道出来ないからこそ、記念日報道は有効であるはずだ。しかし私は記念日報道への違和感があった。次の災害が起きた時のために、今を生きる私たちやその先の世代が東日本大震災の経験をどのように生かせば良いだろうか。

「震災〇年」など周年を意識した言葉が含まれる女川に関する見出しの記事はどのような報道をしているだろうか。

毎日新聞は今回の調査の中で節目を意識した見出しの記事は、7件(震災1年、2年、5年、7年、9年の見出しがあった)だった。

河北新報の節目を意識した見出しの記事を数えると28件だった。4、5、8年以外は1年から11年まで毎年あった。他にも1年半や4年7カ月という毎日新

聞には見られなかった節目の見出しの記事もあった。「震災 3 年」の 2014 年 2 月から 3 月にかけて 7 件あり、「〇年」の記事は河北新報の 1 面では 3 年が一番多かった。被災地の課題など調査によって新たに明らかになった問題について報じている。震災 3 年の年は人口流出や復興についての記事が他の年よりも集中した。震災 10 年の見出しの記事は 2020 年 9 月から 2021 年 11 月まで 4 件あり、2021 年は 1 年間通して震災 10 年の記事があった。

石巻日日新聞は節目を意識した見出しの記事が 21 件だった。震災 10 年は河北新報と同様に前年（2020 年 10 月）から震災 10 年を意識した記事があった。3 紙の中で唯一、震災半年の記事もあり、他に 3 年半、4 年半、5 年半の記事もあった。震災 10 年の記事は一番多く、7 件あった。石巻日日新聞は震災 11 年の見出しは 1 件で、3 月 12 日に地域の 3 月 11 日を伝える記事の見出しに「東日本大震災 11 年」の言葉があったが、2022 年は「語り継ぐ 3・11」のように震災〇年を意識していない見出しの記事中心に変わった。

3 章の女川に関する新聞記事調査でも分かったように毎日新聞では震災から時間が経過するほど記事の件数は減少傾向にある。全国紙は日日取り上げるべきニュースが多くある中で震災関連記事が日常的に取り上げられることは減少し、被災地で大きな出来事がないと取り上げられにくくなる。毎日新聞で女川に関する記事が増加した期間があったが、原発再稼働は関心度の高い問題について動きがあったからであり、大きな出来事だと言える。大きな出来事の一つが原発だと述べたがその他に時間的な「節目」があるだろう。そのため全国紙の節目を意識した見出しは記念日報道だと考えられる。

一方、地元紙 2 紙の場合は、被災地の新聞社であるため、日常的に被災地の復興を取り上げる。河北新報は被災 3 県・宮城県を中心に、石巻日日新聞は石巻地域 2 市 1 町を中心に復興する被災地を取り上げている。地元紙の場合は読者も被災者ということも多く、日常的に被災地の今や復興を伝えている。その報道における見出しの震災〇年という年数の強調の意味は、震災発生からの時間の経過とここまで復興してきていること、または復興過程で新たな問題が生じてきたということ伝えたいのである。見出しに震災からの年数を入れているものの節目だからそのように報道しているわけではない。そのため、地元紙での「震災

〇年」という節目を意識したように見える見出しは全国紙のそれとは意味が異なると考えて良いだろう。

仙台市にあるせんだいメディアテーク館長で哲学者の鷺田清一さんのインタビュー記事が河北新報 2021 年 12 月 24 日朝刊 1 面・4 面に掲載された。鷺田さんは記念日報道、震災をどう語り継いでいくべきかについて述べた。その記事の鷺田さんの言葉は、復興と記念日報道について私の心の中にあったが、うまく言葉で表せなかった思いが言葉になっていた。

鷺田さんは、復興は各被災地で理由があって進められたとした上で、「これが私たちの求めた場所なのだろうか。震災でこれ以上失うものはないと思ったが、まだあったと。復興したものの肝心の街がなかった」という被災地住民の言葉に触れたときは痛かったと述べた。

戻りたかった古里・街はこれなのかという言葉は、ここまでで私が述べてきた震災前の女川の街並みに対する思いにも通じるだろう。震災で中心部の全てが無くなった女川は震災からの 12 年間で震災前とは違う雰囲気綺麗な町になったという感覚がある。私はその女川の街並みを見て復興とは何なのかと思った。復興は「壊滅」と言われた街並みを「元に戻す」ことだと思っていた私にとって、新しく出来ていく町に女川を感じられなかった。私は東京ではあまり感じられない田舎らしさがある女川が好きだったのかもしれない。もう震災前の女川を取り戻すことができない現実が私をそのような感情にさせる。

この鷺田さんのインタビュー記事は「震災から 10 年の年の暮れ」であり、震災から「10 年」という節目についても鷺田さんは語った。

まず、10 年という時間は人によって違うということ。10 年という時間の流れは皆に平等だったが、その中身は人それぞれで同じ 10 年を生きた人はいないことが前提にあるというのが大事な点だと述べた。節目を感じる人と節目を感じない一日を過ごす人がいる。その上で、鷺田さんは「震災〇年のような記念日を作ることが、ある意味で本当に残したいものを壊してしまう面もある。記念日をきちんとやればやるほど、それ以外の日は忘れていられる」と考え、記念日報道について良し悪しがあると述べた。記念日を経て忘れることは、だんだん気持ち

を治めることになり、やがて納得して受け入れることになる。これは必ずしも悪い意味ではない。忘れることで心の負担が軽くなる面がある。しかし、「震災を忘れまい」としてメモリアルな施設を造ったり、記念誌を作ったりすることで、忘れることを加速させることがある。

忘れず記憶するために記念日報道するのではない。「亡くなったり、これから生まれてきたりして、今は不在の人と共にいるという感覚を持つ。それがすごく大事なことはないか。記憶するとは昔を思い出すことでなく、今いない人と一緒に考える感覚を持つことだと思う。何をするときも孫の世代、その先の世代がどうなるかを念頭に置き、今やるべきことを考える。そうすれば、いちいち記憶などしなくても、過去から未来に文化をつないでいける」と鷺田さんは記憶を伝えることについて考えている。記録することにとどまらず記憶を語りつないでいかなければならない。

鷺田さんが述べている、今いない人と一緒に考える感覚・かつてあった出来事を語りつないでいくことの一例が、女川で言えば、4-3 で取り上げた「いのちの石碑」ではないだろうか。中学生という若い世代が、次の世代、その先の世代…というように千年先の命を守るために始めた。他にも、女川の中学生たちは震災の教訓を伝える「いのちの教科書」を出版した。また、被災地では震災遺構の保存について、遺構を見て震災の記憶を思い出したくないという意見と震災を伝えるものとして遺構を残すべきという意見が拮抗していた。女川町では「旧女川交番」が震災遺構として保存することが決定された。保存決定の背景に、いのちの石碑と同様、中学生たちの後世に震災を伝えたい思いがあった。女川町では「還暦以上は口を出すな」という方針で復興を進めてきた<sup>60</sup>。若者の意見を復興に取り入れる姿勢が女川にはある。若い世代の「震災を伝えたい、記憶を風化させたくない」という思いが女川交番の保存につながったのである。

震災を伝えつづけることや、どうすれば命を守れるか、議論を続け、考え続けること。「伝える」「議論する」のではなく、その行動を「し続ける」ことが必要なのである。そのように震災の記憶を日常に組み込むことで、鷺田さんが述べているように記念日を特別に意識することなく記憶の風化を防止に繋がるだろう。

---

<sup>60</sup> 朝日新聞 2023 年 3 月 31 日朝刊 12 面「(声) 将来を託そう、若いモンはすごい」

震災を体験した人は何十年、何百年、何千年と時間が経てばいなくなってしまう。生の震災経験を語れる人がいなくなる前に、次の世代につなぐ必要がある。また、時間が経つにつれて体験者の中でも記憶の風化が起こるだろう。そうなる前に伝え、記憶を伝え続けることが大事である。女川でいのちの石碑プロジェクトがあるということを新聞で全国に伝えるように、伝える手段の一つに新聞をはじめとしたメディアを通じた報道があるだろう。

記念日を記念日化せず震災を伝えるという鷺田さんの言葉から、災害報道の記念日報道化への違和感の解決策の一つとして、「行動し続けること」・「継続性」という自分なりの答えが見つかった。

### 5-3 全国紙・地方紙・地域紙 それぞれの立ち位置

今回の紙面調査では、全国紙、地方紙、地域紙で報道に違いが見られた。それは鷺田さんが記念日報道について述べていたことを表しているだろう。記念日を意識する人が全国紙。自らが被災メディアとなった河北新報・石巻日日新聞も3月11日の近くになると「〇年」という見出しで報道するが、その数日間に東日本大震災の報道が急に増えるわけではない。日常的に被災地の「今」を報じていて、その日常の中の一日に3月11日という日があり、全国紙ほど何年ということ意識していない。実際に記事の件数や記事の内容の内訳からもそう読み取れた。被災地・被災者にとって震災は今も続いている。

石巻日日新聞社近江社長は著書の中で全国紙と地域紙の災害時の役割について次のように述べている。「大手新聞がそれぞれ、被災地域外の読者の要求に合わせて配信する情報機能が柱であるのに対して、地域紙としての報道は、今回は被災者、通常であれば、地域内の読者の要求に強く応えるものであるべきだと思います。よって、自ずと「伝える使命」も違ってきます。全国紙が速報性と正確性を最大要件にした報道であるとすれば、地域紙は、この場合、むしろ正確性と公平性が優先されるのではないのでしょうか」<sup>61</sup>また、河北新報社鹿又報道部次長も「自ら被災しながら、そして被災しているからこそ、他の全国紙では伝え

---

<sup>61</sup> 『6枚の壁新聞 石巻日日新聞・東日本大震災後7日間の記録』p.250

られないことを伝えることができる」<sup>62</sup>と述べている。

分かっている情報を詳細に全て正確に伝えることだけが災害時の地元紙の役割ではない。地元紙は読者との距離も近く、地域の読者のおかげで成り立っている。同じ被災者として「どんな新聞であってほしいか」が分かるのだろう。震災から3日目、河北新報 2011 年 3 月 13 日朝刊 1 面の河北春秋（コラム）にこのような一文があった。

「情報が欲しい。しかし、知った惨状が恐怖を増幅し、心をなえさせるジレンマ。」

また、石巻日日新聞社では震災直後の報道でこのような方針を取っていた。

「避難所などにて、不安な状況で情報を待っている方々の心境を十分に考慮しなくてはいけない。そう考えると、被災状況を細かく伝える情報は、逆に切り落とすべきだと考えました」<sup>63</sup>

絶望的な状況で、この先どうなるかも分からず、折れてしまいそうな心で、変わり果ててしまった町の辛い情報を文字で読みたいだろうか。報道機関としてではなく、一人の人・被災者としてどんな情報を知りたいかという視点で考えたとき、少しでも明るく前向きになれる情報があるのならその情報を伝える方が良いに違いないだろう。

3-1 復旧期の結果でも述べたように、石巻日日新聞では震災後間もない時期に開催されたイベントの様子を 1 面で伝え、前向きな報道姿勢を崩さない。地域の未来につなげようとする思いになれる情報が地域紙には必要で、大人たちが子どもたちに伝えるべきことは「地域の未来」だという考えで新聞を作っている<sup>64</sup>。そう判断して読者が希望を持てる内容を伝えるよう心掛けている。「いのちの石碑」・「女川まちびらき」は 4 章で紙面比較した 5 記事の中で明るい復興の話題である。石巻日日新聞はこれらの記事の内容が他紙より詳細で丁寧に書かれ、「今、この瞬間」よりも「この先の未来」に記事の軸がある。それは自らも被災者でありながら被災者である読者に向けた前向きで希望の持てる記事作り

---

<sup>62</sup> 『河北新報のいちばん長い日 震災下の地元紙』 p.101

<sup>63</sup> 『6 枚の壁新聞 石巻日日新聞・東日本大震災後 7 日間の記録』 p.242

<sup>64</sup> 『6 枚の壁新聞 石巻日日新聞・東日本大震災後 7 日間の記録』 p.248

の表れだろう。

全国紙→地方紙→地域紙というように報道の主なターゲットとなるエリアが狭くなるほど読者と記事の距離の近さを感じた。文字で必要な情報を淡々と伝える新聞の災害報道において「人」を感じることはあまりない。しかし読者にとって生活に身近で必要で自分事である情報が記事になると、人の温もりが記事から感じられた。災害時に被災者の心の拠り所になるものとして必要だろう。

河北新報社に地震翌日の朝刊について読者から手紙が届いた。その中でこのように書かれていた。「新聞＝ニュース、としか思っていませんでしたが、そうではなかったのだと気づきました。励ましや共感、あることに対するいろいろな角度からの意見などが詰まっているのです。いま、私にとっての新聞は「毎朝のプレゼント」です<sup>65</sup>」

また、河北新報女川販売所の阿部所長は震災で「アナログメディアの重要性」を痛感したそう。4-4[震災直後の新聞社]でも述べたように、震災直後の被災地・女川では地元情報が不足していた。「停電の中、頼れるのは口コミと新聞しかありませんでした。避難所に新聞を貼りだしたとき、食い入るように読んでいた被災者の熱い視線が忘れられません。地方に根付く新聞の強さを再認識しました。デジタル化の流れは止めようもないでしょうが、多様な媒体が必要だと思い知らされました」<sup>66</sup>と震災時を振り返った。

全国紙と地域紙の報道には役割の違いがあり、災害時に伝える内容も異なる。被災したメディアだからこそどんな情報が必要とされるか分かる。全国紙だからできる報道と、地元紙だからできる報道がある。

#### 5-4 研究の今後の展望

本研究では震災から 10 年を区切りとして調査を終えるのではなく、11 年の記事も調査対象としたからこそ、石巻日日新聞では記念日を意識した見出しが減少するということが明らかになった。

---

<sup>65</sup> 『河北新報のいちばん長い日 震災下の地元紙』 p.60

<sup>66</sup> 『河北新報のいちばん長い日 震災下の地元紙』 p.146-147

しかし、全ての面や記事というように調査の範囲を広げると、今回の研究とはまた異なる印象を与える結果が得られるかもしれない。特に毎日新聞は東京版に絞って調査した。宮城版の記事を調査対象とすれば結果は変わることが予想される。

被災地の報道を調査するにあたって、地元紙 2 紙の被災新聞社の報道が中心になった。全国紙の視点が地元紙 2 紙に比べて少ない点は課題である。

また、今回の 3 章の記事件数調査では記事の大きさやどれくらい記事内で女川が取り上げられているかを区別せず 1 件は 1 件とした。そのため、大きい記事で女川のことだけを伝えている記事と他の被災自治体と一緒に一つの記事内で取り上げられているため女川の情報は少ないという場合も同じ 1 件となっている。記事でどれくらい女川について書かれているかによって結果を分けて集計することで、今回 3 章で得られた結果とはまた異なる新たな傾向を見出せるかもしれない。

今回の調査対象期間とした 11 年間には「災害直後の混乱期」「災害からの復旧復興期」「ハード面での復興が一区切りついた今」という災害報道のフェーズがあり、それらを新聞報道してきたと考える。ハード面での復興が、まちづくりのように分かりやすく目に見える復興であるとすれば、人同士の繋がり、被災者の心の復興や地域コミュニティなどの復興・再生といった直接目に見えないものがソフト面の復興と言えるだろう。ハード面での復興が一区切りつき、震災から 13 年を迎えようとしている今、変わりゆく被災地で必要なのは復興に時間を要すソフト面での復興かもしれない。

5-2 で鷺田さんの考えをもとにしながら、震災の記憶風化防止方法の一つに記念日報道に頼らない報道の継続性があると述べた。ハード面の復興は目に見えるやすいため、その時の報道で満足してしまうことも考えられるが、報道がなければ被災地・被災者以外の人の中から忘れられてしまうことも考慮すべきである。その出来事に現実味を感じられなくなると人はその出来事が無かったかのように振る舞う。時間が経つと自分事として捉えられない状況に置かれる人が増加する。人はそれが身近に感じられないと理解できず、記憶から消えて無

かったことにする。そのようにして物事は風化していく。時間の経過と物事の風化の関係性と言えるだろう。記録・記憶し続ける、行動の継続性によってこれを無くすることができるのではないだろうか。新聞をはじめとしたメディアで報道し続けることで人の記憶に留め、震災を知らない世代にも伝えることができる。

東日本大震災報道に明確な終わりは見えないが、災害報道に初期・中期・後期があるとすれば、現在は後期と捉えることができるかもしれない。被災者のソフト面の復興とこれからの災害に備えた報道や東日本大震災の教訓を伝え続けることが後期災害報道における新聞の使命だと言える。「新聞紙」として読者・被災者に情報が届き、人々の心の拠り所になるのが災害時の新聞だろう。災害報道に終わりはない。

#### 【参考文献】

- ・朝日新聞社.(2011).『朝日新聞縮刷版東日本大震災：特別紙面集成 2011.3.11－4.12』.
- ・石巻日日新聞社.(2011).『6枚の壁新聞 石巻日日新聞・東日本大震災後7日間の記録』.角川マガジンス.
- ・女川町観光協会.(2012).『おながわ再開情報 只今復興中 絆!! がんばる女川』.
- ・女川町観光協会.(2023).『海・山・街 すべてを楽しむ おながわ ONAGAWA』.
- ・女川町誌編さん委員会.(2022).『女川町誌 第三編』.
- ・河北新報社.(2014).『河北新報のいちばん長い日 震災下の地元紙』.文春文庫.
- ・七十七銀行女川支店被災者家族会.(2017年1月25日).『2016.3.5 フォーラム 東日本大震災から学ぶべきもの 大切な命を守る 企業防災・組織防災を一緒に考えましょう 七十七銀行女川支店被災状況と家族会 5年のあゆみ<報告書>』.
- ・東北電力.(2023年4月).『女川原子力発電所見学 BOOK 女川原子力発電所

ってどんなところ？』

東北電力女川原子力発電所.『あの日を、未来へつなぐ。－女川原子力発電所の備えと教訓－』.

### 【参考 URL】

・石巻地区広域行政事務組合.「石巻広域圏のあらまし」.(石巻地区広域行政事務組合ホームページ: <http://www.ikouiki.or.jp/info/keniki01.htm>)

・女川町.(2015 年 11 月).「女川町東日本大震災記録誌」.(女川町ホームページ:

<https://www.town.onagawa.miyagi.jp/shinsai/HTML5/pc.html#/page/10>)

・女川町.(2021 年 3 月).「女川町復興記録誌 2011－2021」.(女川町ホームページ:

<https://www.town.onagawa.miyagi.jp/hukkoukirokushi/html5.html#page=331>)

・女川町.「人口世帯集計表」.(女川町ホームページ:

<https://www.town.onagawa.miyagi.jp/gyouseikujinkou.files/r0509.html>)

・女川町.「町の紹介」.(女川町ホームページ:

[https://www.town.onagawa.miyagi.jp/02\\_01\\_01.html](https://www.town.onagawa.miyagi.jp/02_01_01.html))

・女川町.「令和 4 年度女川町統計書」.(女川町ホームページ: [r04\\_toukei.pdf](https://www.town.onagawa.miyagi.jp/r04_toukei.pdf) ([town.onagawa.miyagi.jp](https://www.town.onagawa.miyagi.jp)))

・河北新報社.「河北新報媒体情報」.(河北新報総合広告ガイド:

[kahoku.co.jp/ad/media\\_guide\\_web/index.html](http://kahoku.co.jp/ad/media_guide_web/index.html))

・気象庁.(2011 年 8 月 17 日).「【災害時地震・津波速報】平成 23 年 (2011 年) 東北地方太平洋沖地震」.(気象庁ホームページ:

[https://www.jma.go.jp/jma/kishou/books/saigaiji/saigaiji\\_201101/saigaiji\\_201101.pdf](https://www.jma.go.jp/jma/kishou/books/saigaiji/saigaiji_201101/saigaiji_201101.pdf))

・気象庁.「震度・マグニチュード・地震情報について」.(気象庁ホームページ: <https://www.jma.go.jp/jma/kishou/knownow/faq/faq27.html#5>)

・緊急災害対策本部.(2023 年 3 月 9 日).とりまとめ報「平成 23 年 (2011 年) 東北地方太平洋沖地震 (東日本大震災) について」.(内閣府ホームペ

ージ：[torimatome20230309.pdf \(bousai.go.jp\)](https://www.bousai.go.jp/torimatome20230309.pdf))

・国土地理院. (2011 年 4 月 18 日). 「平成 23 年東北地方太平洋沖地震 市町村別津波浸水範囲面積（概略値）第 5 報」. (国土地理院ホームページ：

<https://www.gsi.go.jp/common/000059939.pdf>)

・首相官邸. (2020 年 1 月 21 日). 「内閣官房長官記者会見」. (首相官邸ホームページ：[https://www.kantei.go.jp/jp/tyoukanpress/202001/21\\_a.html](https://www.kantei.go.jp/jp/tyoukanpress/202001/21_a.html))

・消防庁. (2023 年 3 月 1 日). 「平成 23 年（2011 年）東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）の被害状況」. (消防庁ホームページ：[220726\\_kiho\\_163.pdf \(fdma.go.jp\)](https://www.fdma.go.jp/220726_kiho_163.pdf))

・東京都. (2011 年 9 月 14 日). 東日本大震災における東京都の対応と教訓 — 東京都防災対応指針（仮称）の策定に向けて —. (東京都ホームページ：[230914taiouhonsatu.pdf \(tokyo.lg.jp\)](https://www.tokyo.lg.jp/230914taiouhonsatu.pdf))

・東北電力. 「女川原子力発電所の紹介」. (東北電力ホームページ：

<https://www.tohoku-epco.co.jp/electr/genshi/safety/onagawa/introduction.html>)

・復興庁. 「がんばれ復興!! まちづくりトップランナー」. (復興庁ホームページ：<https://www.reconstruction.go.jp/topics/main-cat1/sub-cat1-1/20140529165543.html>)

・毎日新聞社. 「毎日新聞社の歩み」. (毎日新聞営業総本部ポータルサイト：<https://macs.mainichi.co.jp/ad/about.html>)

・毎日新聞社. 「全国の配布エリアと販売部数」. (毎日新聞営業総本部ポータルサイト：<https://macs.mainichi.co.jp/ad/area.html>)